
今の私

夏月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今の私

【コード】

N0009T

【作者名】

夏月

【あらすじ】

もうすぐ三十歳になる私、ある日知らない世界にいました。

道の途中

初めてこの世界に来た日から考え続けていることがある。

ここはどこなんだろう。

人も街も動物も、みんな似ているようでどこか地球と違う。

たとえば、今すれ違った人。一見すればただの男性。だけどその耳は長く、上のほうは少しとがっている。

たとえば、今私が向かっている建物。温かみのある木造建築。けどどここんな建物、以前はテーマパークでしか見なかった。

たとえば、今日私が食べた食事。肉が使ってたけど、生きているものを見たことがある。豚に似ていたけど、あれの鼻は象のように長く伸びていた。

ここはどこなんだろう。

結論はまだ出ていない。

始まりの始まり

気が付いたら私は知らない家の中にいた。どうしてここにいるのかは分からない。私は確かに自分の家のドアを開けたはずだ。

その日私はお昼ごろに家に帰った。新しい会社の面接を受けた帰りである。

私は少し前に、以前働いていた会社を辞めたところだった。その会社では理不尽に思えるような状況で退職が決まって、やっとの思いで気持ちに区切りをつけて新しい仕事を探し始めていた。

私は以前の会社を気持ちの整理がつかないまま辞めたせいで、しばらくの間ひどく落ち込んでいた。さんざん周囲に心配を掛けて、それでも気持ちが晴れなくて、閉じ籠りぎみになったりもした。

しかしそのままではいけない。生きていくためにはお金がかかるのだ。お金を稼ぐためには働かなくてはならない。いい大人がこんなことでどうする。

自分自身に無理矢理叱咤激励し、強引に気持ちを切り替えてやっと就職活動を始めることが出来た。動き出した私に安心する周りを見て、頑張らなければいけないと強く思ったりもした。

その日、私は面接から帰る途中で、ふと昨日の夜に無くなった調味料のことを思い出した。たまたま帰り道に大きなスーパーがあつて目に入ったからかもしれない。スーツ姿だったが寄ってしまうことにした。

終わってしまった調味料を選んで、ついでに無くなりそうだったものや興味があつたものも揃えた。必要な物はそれだけだったけど、これでレジに持っていくのはかなり勇気がある。少し考えて簡単に食べられるバナナとお菓子、あつても困らないペットボトルのお茶を追加した。

そのせいで予想以上に重くなった荷物を、私は大分苦勞しながら駐車場から玄関まで運んだ。

資料の入った鞆と調味料の入った袋が特に重く、腕に食い込んでいく気もした。ピンをガチャガチャさせて、面倒臭がらずに分ければ良かった、バナナに傷が付いたな、そんなことを考えていた。

家のドアを開けて中へと数歩踏み出しノブから手を放した。荷物を置いたら振り返るつもりだった。テレビで女の一人暮らしは危険だと何度も言っていたからもちろん鍵も掛けるつもりでいた。

だけど何も出来なかった。その時にはもう私はここに居たから。

とつさに反応出来なかった。声を出すことも出来ず、しばらくそのままの形で止まっていた。何が起こったのかまったく理解出来ていなかった。

ひどく混乱していて、そして混乱したまま視線を下げたら床に人が倒れていた。灰色の不思議な上着を着ていたけど人であることは間違いない。うつぶせで伸ばした片手は私の足元まで来ていた。

「だ、大丈夫ですか？」

慌てて腰を落として声をかけた。思わず揺さぶってしまったけど、

その人はわずかに呻いただけだ。パニックになりながら片手で鞆を探る。

携帯電話を引つ張り出して、震えそうになる指でボタンを押した。110だったか、119だったか、とにかく誰かに伝えたくてボタンを押した。間違えていたらもう一度かける、押しながら思った。

だけど携帯電話から望む反応は無い。慌ててもう一度ボタンを押そうと画面を見た。ボタンを押しながら気付く、圏外って出ている。

「使えない携帯って・・・」

放り投げるように携帯を放して立ち上がるうとした。知らない家だが、家の中なのだ、家電を探すつもりだった。

その時、弱弱しく声が聞こえた。慌ててもう一度腰を落とした。

「だ、大丈夫ですか？」

いつの間にか、うつ伏せから仰向けになっていた人は、どうやらおじいさんらしい。白髪としわの刻まれた顔が見えた。薄く目を開いていて唇がかすかに動く。私は耳を寄せて声を聞こうとした。

しばらくその状態でいて、やっと声が聞き取れた、と思ったら脱力した。

「腹が減った」

私は脱力しながらも、買い物袋からバナナを出してセロファンを破いた。皮もむいてそれをおじいさんの口元に押し付けた。

おじいさんは無言で咀嚼していた。

倒れるほどお腹が空いているならまだ食べるだろう。次のバナナの皮をむいて、また押し付けるつもりで待機する。とりあえずバナナがある限り同じ行動を取ってみようと思う。

いつのまにか、おじいさんは起き上がり、あぐらをかくように座っていた。

とても細身の人であることが分かった。ぶかつとした服を着ていて、あまり体の線は見えない。なのに、全体的なシルエットとしてかなり細いのが分かるのだ。服から覗く、首にも腕にもしわが濃く浮かんでいた。

だけど実は痩せてるからそう見えるだけで、実際にはそんなに年を取っていないのかもしれない。私は人の年齢を当てるのが苦手なのだ。人の年齢を聞いて驚いたことは一度や二度では無い。

日本人には見えないけど、どこの国の人だろうか。コーカソイド系の肌の色をしている。顔はこんなに痩せていなければかなり良い方だと思う。細い面にすつと通った鼻と目をしていて、手入れをしている訳でも無いだろうに眉もきれいな形をしている。今はバナナを頬張り過ぎているせいで崩れているが、顎の線はシャープだ。唇は薄く、色はほとんど無い。

若いころは美形だっただろうな。すごくもててそう。髪もふさふさだし。

そんなことを思ってしまったのは、今日受けた会社の面接官の髪が

寂しいことになっていたからだろうか。

ぼんやり人間観察をしてしまう。

ああ、それにしても、倒れるほどお腹が空いていたのにスープとかじゃなくて丈夫なのだろうか。次ぎ食べるとしたらヨーグルトだろうか、それともクッキーのほうが良いのか。私は不法侵入に当たるのか。ヨーグルトは食べるのにスプーンがいるから、クッキーのほうが良いかも。そういえばさっき日本人じゃ無いのにすっかり日本語話していたな。

とりとめもなく次から次に考えが浮かぶ。まだ私は混乱しているのかも知れない。

誰か教えて

私はおじいさんに、自分が気付いたらここに居たということをお話さなければならぬ。

事情を話さずに帰ることは出来ないし、倒れていた人を放つてこの場を離れるわけにもいかない。何よりこのままでは不法侵入である。バナナをあげて介抱らしきものをしたとしても、私が無断でこの家にいるのは間違いない。

介抱したと自信を持って言い切れないのは、私がしたのは実質バナナをあげただけだからだ。人に聞かれたとしてもなかなか答えづらい。救急車を呼んだほうが良いのかもしれないけど、目の前で本人がものを食べている状態で来てもらえるのだろうか。

そして何より、現状を聞くもしくは話すためとはいえ、倒れるほど空腹だった人の食事に割り込むのは大変気が引ける。私が事情の説明をするのは、おじいさんが食べ終わるまで待つのが正しいだろう。私がそんなことを考えている間も、おじいさんは無心にバナナを食べ続けている。しかしその割にはよく噛んでいる。注意をするのを躊躇うほど必死なので、喉に詰まらせそうに無いのは良いことだと思う。

購入したものの中にはペットボトルのお茶もあった。一応用意しておいたほうが良いだろうか。思い出した私は再び買い物袋から目的のものを引っ張り出すことにした。

それにしても考えれば考えるほど分からない。ここはどこなんだろ

う。私は普通に帰って自分の家のドアを開けたつもりなのだ。いつもと違う行動はしていないのに、家を間違えたりなんてするだろうか。

しかし家を間違えた可能性が一番高いのも事実だ。振り返って壁を見ると、確かに私の後ろにはドアがあった。だいぶ離れているように感じるけど、混乱しているうちに動いたのかもしれない。

私はおじいさんにバナナを渡すと、そのままドアまで行ってみた。そして何気なく開けてみて後悔した。そこにあっただのはどう見ても知らない部屋で、私の望んだ外の景色では無かったからだ。慌てて閉めておじいさんのところまで戻った。

次のバナナを用意しながら、別のドアを探して周囲を見渡す。しかし私はドアを探すよりも先に、部屋の広さに驚くことになった。

今まで気にしている余裕なんて無かったけど、この部屋は本当に広かった。驚きのあまり思わず手に力が入りそうになる。しかしぎりぎりセーフ、傷になってはいないだろう。

私達の居たこの部屋は、一辺が少なくとも二十メートル、広ければ三十メートルほどもありそうな非常に大きな部屋だった。部屋というよりすでにホールだ。床にはいろいろな物がひどく乱雑に置かれていて、中には崩れそうなほど高く積み上げられているものもある。

そしてこんな広い場所なのに、ここには窓が一つも無かった。壁はドア以外すべて棚でふさがっている。棚は完全に天井まで届いてしまっているので、正直圧迫感が物凄い。

棚には大きささまざまな本が立て掛けてあったり、巻物みたいな筒状

のものが積んであったり、いろいろな色と大きさのビンが並べてあったりした。規則性は無いようだけど、すべての棚が乱雑に何かでうめられている。

呆然と見上げたまま固まりそうになる。慌てて視線をはずして、ひどく焦っておじいさんを見た。言葉に出来ない色々なものが私の中で渦巻いている。

考え込みそうになりながら、結局もう一度周囲を見渡した。

肝心のドアは、おじいさんを挿んだ向こう側の壁に一つと、左右の壁に一つずつあった。私が先ほど確認したドアもあるので、この場所を囲む壁にはそれぞれ一つずつ全部で四つのドアがあることになる。

しかしあらためて見ると、私はそのドアにひどく違和感を感じてしまう。じつと観察していたが、しばらくしてやっとその違和感の正体に気付いた。

おかしく見えたのは、先ほど私が確認しに行ったドアを含めて、ここにあるすべてのドアが両開きの物だからだ。表面には立派な彫刻も施されている。

私の家のドアはごく普通の片面の物だ。なぜ私は入るときに気付かなかったのだろう。一体どうやってここに入ったというのか。まさか外から見たら片面、中から見たら両面なんていう不思議なドアがあるのだろうか。

その上、どのドアも私の居る場所からはかなり離れていた。入ってすぐにおじいさんに気付いたとはとても言えないほどの距離がある。

いやいや、そんな馬鹿な。いくらなんでも距離がありすぎる。10メートル以上は間違い無くある。いったい私の一步がどれだけ大きいというのか。いくら気が抜けてほんやりしていたとしてもこれは無いだろう。

おじいさんを回り込んで確認に行くのは、さすがに拙いので自重する。私はさつき違う部屋を見てしまったばかりなのだ。知らない人のお宅を無断で家宅搜索。それは犯罪です。

心の中だけで軽口をたたき、視線はおじいさんに戻した。

何かが飲み込めないような、そんな気持ちの悪いものはずっと感じている。必死に探しているのに納得のいく答えも見つけられない。思考は空回りばかりで、まとまらない頭はそれでも必死に動き続けている。

おじいさんは手元のバナナに集中して、私はそんなおじいさんに集中する。普通に見ればおかしな光景のはずだ。自分が関係無くて傍らで見る分には楽しそうにすら見えるかもしれない。

だけど私の思考はとても焦っている。出したくない結論があるのだ。そこまで考えて私は意識して思考を止めた。その先を考えてはいけない。そんなことはありえない。無理矢理肩の力を抜いて、笑みを作るように口角を持ち上げた。気持ちは乱れたままだったけど、これが自然なはずなのだ。

出来れば一刻も早く外に出たかった。だけど出口の分からない今、勝手に動くことは出来ない。

大丈夫、すぐに帰れる。おじいさんが落ち着き次第、出口を聞けば良いんだから。そうしたら不法侵入を誤って家に帰れば良い。今日の面接の反省は明日にして、お風呂に入って寝てしまつのもありかもしれない。明日になったら、変な目にあつたつて友達にメールしてきつと笑える。

一つ大きく息を吸い、大きく吐いた。バナナを食べるおじいさんを見る。

うん、私はまだ混乱している。深呼吸の効果は薄い。

帰らなくちゃ

それにしてもおじいさんは不思議な格好をしていた。

銀色にも見える柔らかな灰色一色の、引きずるほど丈の長い上着のみを着ているように見える。フードは付いていたけど本当にそれだけで、他にボタンなどの装飾はまったく無いようだ。

それは上からすとんと被るデザインだった上に、柔らかな質感があるので寝巻きのようにも見えた。むしろ寝巻きで無いと、こんなに丈が長いと足に絡んでひどく動き難いと思う。

煩いくらい響く心臓の音を持って余しながら、私はいつものように必死になって今を取り繕う。何もしていないとまた考え始めてしまうし、手持ちのバナナもこれで最後なので早く帰る準備をしよう。

そういえば私は携帯をどうしたんだろう。硬い床に直に落としてしまったんだろうか。

おじいさんに最後のバナナを手渡すと、私は床の上を探ることにした。しかしいつ下ろしたのかも覚えていない鞆と、いろいろ引つ張り出した買い物袋が邪魔で見つからない。帰るためには先にこちらを片付けたほうが良いのかもしれない。

とりあえず二つあった買い物袋は、中身を幾つか取り出したせいで余裕があった。ごみを入れる袋が欲しかったこともあり一つに纏めて詰め直すことにする。

荷物を片付けていると、乱暴に放り出してしまった携帯がやっと見

つかった。拾って傷を確認しながら表面を軽く一撫でして、小さな音を立ててそれを開いた。見た目は平気そうだったけどデータはどうだろうか。バックアップを取ってないので、これが動かなくなるかと本気で困るのだ。

画面は変わらず、明るい光を発してくれた。電波の表示は変わらずに圏外だったけど、とりあえずメモリが開けられることだけは確認出来たので大丈夫だ。圏外になったままなのは、きつとたまたまどこかで妨害する電波でも出ているからだろう。

私が片付けている間も、おじいさんはバナナを食べていた。食べさせた私が言うのもおかしい話ではあるけど、一度にこれほど食べてしまつて本当に大丈夫なのだろうか。胃が痛くならないと良いのだけ。

おじいさんはすべて食べ終わると満足したように息を吐いたので、私は横に置いてあったペットボトルも蓋を開けて差し出してみた。受け取ったおじいさんは一口飲み、その後は勢いよく飲み干している。私はペットボトルの蓋を握り締めてじつと見ていた。

おじいさんは中身をすべて飲み干し、最後に片手でグイとぬぐう。そして視点がぼつちり私に止まり、やつと言葉を發した。

「どうしてここにいる？」

すごく待っていました私、その言葉を。やっとひとごち付いたらしいおじいさんに話しかけられて、私は現状を説明出来ることにほつとしていた。

「大丈夫ですか？私は気が付いたらここに居たんです」

声が震えないように気をつけながら答えた。すぐにも出口を聞き
たかった気持ちを抑えて現在の体調を聞く。

空のペットボトルを握り締めていたおじいさんから受け取り、キャ
ップを閉めて他のごみと一緒にまとめた。分別なんて家に帰ってか
らすれば良い。

「ごめんなさい。勝手に上がりこんでしまつて。すぐに帰りますの
で許して下さい」

私を睨むように見ているおじいさんの顔を見ながら話しかけた。

「人を呼んだ方が良いですか？帰ってしまったても大丈夫ですか？」

おじいさんはさっきまで床に倒れていたとは、とても思えないほど
しっかりしているように見えた。

眉間に深いしわが寄っているが、意識もはつきりしているようだし、
目にも力がある。きつともう大丈夫だろう。

眉間のしわは、いきなり見知らぬ他人が家に居て不審に思ったに違
いない。

顔色が良くないようにも見えるが、それははつきり言って私にはよ
く分からなかった。私が外国の人と実際に会ったことがあるのは、
はるか昔の学校や観光地に旅行に行ったときくらいなのだ。

しかし精一杯の言葉だったのだけど、おじいさんは何も応えてくれ
ない。

さっき呟いていたのも日本語だったので、言葉が分からないということは無いと思う。なのにただ強い目で私を睨むだけだ。

しばらく言葉を置いて見たが、何も言ってもらえない。これはもう、帰ってしまったても良いということだろうか。

だけど私には出口が分からないのだ。おじいさんに教えてもらえないと端から開けるしなくなる。いくらなんでもそんな非常識なまねは出来ないし、おじいさんだつて自分の家を他人に覗かれるなんて嫌だろう。

それに何より本当に大丈夫なのかが気になった。実は動けなかったとかいうことは無いだろうか。具合が悪いかもしれない人を放り出してこの場を離れて良いのか。

判断が付かなくて、私は次に進めない。せめて何か話してくれれば次の行動を起こせるのにとじりじりしながらおじいさんを待つ。

「大丈夫ですか？」

お願いだから何か言ってくれ。

「私は大丈夫だ」

返答があった。嬉しくなつて笑みが浮かんだ。

「ご無事で良かったです」

これはあれだな。無言の抗議つてやつだったんだろう。私は自分で

疑問に答えて納得することにした。

荷物をまとめて抱える。私がいたら休めないだろうし、出口を教え
てもらって早くお暇しよう。

「すみません。パニックになってしまったみたいで玄関はあちらで
すか」

おじいさんの後ろのドアを手でさしながら聞いた。

おじいさんは相変わらずじっと私を見ている。ちょっと気まずく思
いながら返事を待った。やっぱり怒られるんだろうか。それにして
は雰囲気は怖くない。空気が張り詰めるような真剣な表情ではある
けれど。ただし眉間のしわはさらに深くなっている。

勝手に家に上がりこんでしまったのは、確かに私が悪い。だけどこ
れは、そう、言うなれば人命救助。訪問販売の人だって、訪ねた先
で人が倒れていたら思わず駆け寄り寄るだろう。

そういえばバナナをあげたんだ。食料も提供していることだし、こ
こは一つ、大らかな心で許してもらいたい。

びくびくしながら、だけど表面上は冷静を装って、おじいさんの言
葉を待つ。

長く感じる、だけど実際にはきつとそれほどでも無い時間が経過し
て、おじいさんはやっと言葉を発した。

だけど、それは思いもよらない言葉で、私はおじいさんが発した言
葉に表情を無くすことになる。

「君はここから帰れない」

11111111

あまりの言葉に私はとっさに反応することが出来なかった。伝えるだけ伝えてまた口を閉ざしてしまったおじいさんを、完全に表情を無くした状態で私は呆然と見つめる。

ただし呆然としているように見えるのは身体だけだ。せつかく一度は止めようとした思考の渦は簡単に復活してしまったので、むしろ脳内は必死で動いている。

この状態は意外すぎる言葉を聞いたために、私に表面を取り繕う余裕が無くなってしまったからだ。先ほどまで必死に覆っていたものは、ずっと続いている不安感によってすでに押し流されてしまった。

おじいさんも先ほど始めて私を認識したときからまったく視線を離さず、眉間にしわを寄せた状態できつく睨みつけている。いつもの私だったら、すぐに気まずく感じて視線を外していたと分かるほど強い目だった。

しかし今の私は不思議とそれを怖いとは感じず、無言で向き合う時間がしばらく続いた。

「誘拐されたっていうことでしょうか」

とりあえず真つ先に思ったことを口に出してみた。そんなことはありえないと分かっているから、これは否定されるための質問である。

私がいっそんな犯罪に巻き込まれたというのか。

おじいさんは先ほどまで倒れていたし、私はここまで歩いて来た。意識が途切れた覚えは一度も無いし、荷物もちゃんとここにある。乱暴されたと言うほど服も乱れてないし、薬など吸ってないので意識もはっきりしている。

この家に対して多少驚いたたことはあったけど、それ以外におかしなことは無い。いや、無いはずなのだ。

「ここは君がさっきまで居た場所とは違う場所だ」

何を言っているのか分からない。どうやって違う場所に来たというのだ。私は確かに歩いていてここまで来たのに。

「どうやってここまで来たかは分からない。だが確かに君はこことは違う場所から来た」

おじいさんから返答を貰ってしまって、どうやら私の考えは言葉に出していたようだと思付いた。

そんなことがあるわけ無い。真面目そうに見えて実は冗談が好きな人なんだろうか。ちやかして笑い話にしまいなくなるけど、おじいさんは真剣な表情のままだった。

私を不安がらせて、からかいたいだけなら止めてもらいたい。早く出口を教えて欲しい。そんなに私の存在が不快だったのなら、からかうなどしないで出口さえ教えてくれればすぐに帰るのに。

「何を言っているのか分かりません」

少しずつ気持ちが悪く不安定になっていくのが分かるけど、すべてを強

引に押し隠すと平坦な声を出すように努めた。喚きだすことことなど出来ない人間なのだ。

「ならばそのドアを開けてみる。知っている場所だったら帰ると良い」

おじいさんは自分の右手のドアを指差した。私から見ると左手、先ほど見てしまったドアとは別の物だ。そちらから入って来たのだろうか。外に出られるなら、私はどれでも構わない。

私はここに来たときより多少軽くなった荷物を改めて抱えて立ち上がった。帰る準備は出来ている。

一つおじいさんに対してお辞儀をすると、ゆっくりとした足取りを心掛けてドアまで歩く。

ただどこに行くまでに、私は何故か自分が非常に緊張していることに気付いた。先程まで逸っていた心はすっかり鳴りを潜めてしまっている。

何か怖くて、何故か怖くて、泣きそうになっている。私の手は震えていた。

おじいさんの言葉は冗談だ。そんなことある訳無い。ドアを開ければ、そこは見慣れた住宅街のはずだ。家を間違えてしまって、普段付き合いの無い近所のお宅にお邪魔してしまっただけだ。

私の手は静かにノブを握った。そして慎重に回す。何故か、私の中のどこかが盛んにストップをかけるけど、私はその思いを強引にねじ伏せて静かにドアを開いた。

そこは確かに外のようだった。室内にくらべてわずかに冷えた空気とかすかな風を感じる。

いつの間にか閉じていた目を必死に開いて、私はドアの向こうを見た。

そして後悔した。そこにあるのは私の望んだ光景などでは無かった。

そこでは室内の人工的な明かりや太陽の暖かな光とは違う、静かな湖面の底を想像させる光に照らされた鮮やかな花々が咲き誇っていた。

人の手によるものとは違い実に様々な色で溢れかえっている。背丈の高さも大きさもそれぞれで、しかしそれでも自らの鮮やかさを競い合うように広がっていた。そこは住宅街には到底有り得ない一面の花畑だった。

その遠く向こうに木々の葉だと思われる、人など簡単に飲み込めそうな濃い緑が暗く広がっている。それはこの場所を閉じ込めるようにぐるりと長く覆っていた。遙か向こうに見えるのに暗い影は長く伸び、だからこそ余計に花の色が引き立っている。

花畑と森はまるで対照的で、しかしだからこそ一幅の絵画のように不思議と調和が取れているように見える。

だけど、それだけだったら、私はその場所にまだ納得できた。いつそ誘拐説を認めてしまっても良かったのだ。

しかし私はその向こうに、ありえないものが見えることに気づいて

いる。

空には三つの月があった。

大きな二つと小さな一つ。偽者であることなど望めない、圧倒的な存在感でそれらはそこにあった。

三つの月のうち、二つはまるで太陽のように大きく重なり合うように存在して、涙にでも濡れたように青い光を発している。その大きさは地球のように遙か遠くから私たちを見守るわけでは無く、手を伸ばせば届きそうなほど近くに感じる事が出来る。

最後の一つ、小さな一つはその二つに比べるとまるで玩具のような大きさで、少し寂しく離れて存在していた。大きさだけなら大きな二つに紛れてしまいそうな儚さだ。

しかし空の主演は間違いなくその小さな月である。

小さな月の輝きはいつそ鮮烈なほどに眩しく、まるで宝石のように鮮やかだった。そしてその白い月の光は、陽炎のようにその後ろを追いかけて長く伸びている。留めきれなくなった輝きがもれてしまったようにも見えた。

美しく幻想的な光を放つ、けして地球では見ることの出来ない月。

腰が抜けてしまったように体に力が入らなくて、空を見上げながらその場にへたり込んだ。

後ろから誰かが近づいてくるを感じる。ぼんやりおじいさんだと思った。おじいさんは私の後ろまで来ると、同じように座ったよう

だった。

声が出せなくて、月から目が離せなくて。私はそこから動くことが出来なかった。

知らない所

私は一晩中そこに座って月を見上げていた。

鳥の声も虫の音も無い静かな夜に、花々が咲き誇る庭園で大きくて鮮やかな月を見上げる。まるで現実感の無い光景だった。

私は神隠しにでもあったのだろうか。それも日本以外の別の国でも、時間を移動したわけでも無い、それこそ地球とはまったく違う別の星へと来てしまったのだろうか。

月が完全に空を去って、太陽が昇りきるまで、繰り返し考えていた。

周囲が明るくなりきったころ、私はようやく空から目を離すことが出来た。

しかし何気なく後ろを振り返った私は、また驚かされることになった。ぼんやりしていた意識も強制的に覚醒する。

私の後ろでは、なぜかまたおじいさんがまた倒れていたのだ。

いつから倒れていたのだろうか。やっぱり具合が悪かったのだろうか。今度こそ何かあったのかもしれない。

「ちょよ、大丈夫ですか」

慌てて這いずるように近寄って、仰向けになっているおじいさんを覗き込み揺する。

しかしおじいさんはごろんと寝返りを打った後に長く呻いた。だるそうに起き上がり伸びもする。

「寝ていただけですか・・・」

呆然としながら、そして安心で気が抜けた私の声が空しい。床に両手を付いて、深く項垂れる。気持ちの振り幅が大きくてそろそろ辛い。

「何をしている、早く来い」

おじいさんの声が聞こえた。顔を上げると、前方に見えるドアのところでこちらを振り返っている。

慌てて起き上がろうとしたけど、何しろ一晩中、固い床の上に座り込んで居たのである。足、とくに膝から下は全く力が入らない。

何とか騙し騙し起き上がったが、まるで生まれたての子牛のようである。凄くプルプルしている。

それでも何とか前に進み、おじいさんが開けたドアを目指す。

そういえばこのドアは、あの部屋にあったドアのうちでまだ確認していないものになる。先に待っているものが分からなくて不安になるが、とにかく前に進まなくてはならない。

亀のような歩みでも何とか進み、ドアにもたれかかるようにしてあの部屋から出た。

その先は、リビングか食堂、そんな感じの部屋だった。ここもかな

り広い。真ん中に大きなテーブルがあり、その向こうにはまたドアがある。ドアは他に右手に一つ、左手には二つ。

左手奥のドアが開いていて、そこからおじいさんの後姿が見えた。

「座っている」

おじいさんのそっけない声が聞こえた。縋り付くようにテーブルに付き、荷物を足元に置く。地味に重い物袋が辛い、重い。ぐったりしながらおじいさんを待った。

暫くしておじいさんは戻ってきた。手にはお盆のようなものを持っている。底の深いお椀のような皿に、スープのようなものが入っているのが二つ。底の浅い大皿に、ざっくり切られたパンのようなものが乗せられたのが一つ。スープの入ったお椀からは湯気が上がっている。

おじいさんはそれを一つ私の前のテーブルに置き、もう一つを手近な椅子のあるテーブルの上においた。そして最後にパンの乗った大皿を盆ごとテーブルの上に置きながら座る。

「食え」

一言。それだけ言うと、さっさと自分の手前にあつたお椀を持ち上げてすすり始める。

そっけない一言だった。

だけど何故か涙が出そうになった。誤魔化すように私もお椀を持ち上げ、スープをすする。

スープを飲んで、パンを一枚頂く。食欲は無いと思っていたけど、食べ始めると意外と何とかなる。スープは薄かったしパンは固かったけど、温かいスープもパンも私の気持ちを落ち着けてくれた。

おじいさんも同じようにスープを飲み、パンを食べた。食べてる間にはどちらも無言だった。

食事のおかげで少し落ち着いたら私は、驚きすぎたせいで肝心の質問すらしていないことに気付いた。

「ここはどこなんですか」

「ここはリース聖教国、ラリズの森だ」

やっぱり知らない地名きた。あんな月がたくさんある国が地球にある訳無いと思っただけど、やっぱり実際に知らない地名聞くと力が抜ける。

「おじいさんは誰なんですか。私の名前は佐藤 瑞樹です。」

ぐっったりした状態で、それでも何とかおじいさんの顔を見ながら伝えた。

しかしその瞬間、おじいさんの眉がピクリと動いたことに気付いてしまった。心の中だけならともかく、実際におじいさん呼びは不味かっただろうか。次からはどうしよう。

「私の名前は、ラフィニカ・フィエズ・ギリニテだ」

やっぱりそうだね、横文字名。言われるまでもなく、確かにこの家はもちろんおじいさんも外国の人っぽい。

「ごめんなさい。名前が先なら瑞樹 佐藤です」

潔く正しておく。おじいさんは一つ頷いた。

「地球とか、日本とか、東京とかの場所は知らないですよね」

駄目元で聞いてみた。もし知っていたら一気に解決する。別に東京に住んでいる訳では無いが、日本で有名なのは東京だろう。でなければ、京都、大阪だろうか。

「知らない。ニーフォヤトウキヨはあるが」

「ちなみに何ですか？」

「野菜だ」

また力が抜ける。もう私にはおじいさんの顔を見ることが出来なかった。

深く深く息を吐いて、額をテーブルに押し付ける。冷たさが気持ち良い。しかしこのテーブル、そして座っている椅子も不思議な質感がある。硬いのに柔らかい、いや、柔らかいのに硬い？

確かに硬く感じるのに、不思議と包まれるような弾力も感じる。椅子はともかくテーブルが柔らかかったら不味いだろうに、皿を置いていたときも、頭を乗せている今も、まったく違和感を感じない。ひたすら気持ち良い。ちょっと癖になりそう、手のひらでぺたぺた

表面をさわる。

「やっぱり自分で来たのでは無いんだな」

そんな状態の私にも冷静な言葉。やっぱり眉間にしわを寄せているんだろうか。

「もちろんです。私に瞬間移動の能力はありません」

テーブルに額を乗せているからか、どこかくぐもった返答になる。

おじいさんが頷いている気配がする。

どこかが麻痺しているのか、感情がまったく追いついてこない。夢でも見ているような心地で、これが現実のことと受け入れられないのかもしれない。

夢なら早く覚めないかな、ぼんやり思う。

だけど足はまだ痺れているし、机の冷たさはこれが現実であることを私に伝える。聞かなければいけない事はたくさんあるはずなのに考えはまとまらない。

ああ、でも、これだけは、

「私戻れますか」

おじいさんは答えてくれなかった。

これからどうする

私は、おじいさんが私の質問に答えてくれるのを無意識のうちに期待していた。

しかしおじいさんは私の質問に答えず、だからと言って何か他のことを言うわけでもなかった。それきり口を噤んで黙ってしまったのだ。

なぜおじいさんは答えてくれないのか。知っているのか知らないのか。

おじいさんが何を考えているのか、私はとても気になった。

しかし私は、それを口には出来ない。今口に出してしまったら、間違いなくおじいさんをひどく乱暴な言葉で責めてしまう。

先ほどの口調ではおじいさんは私のことを知らないようだったし、私がここにいることをおじいさん自身も疑問に思っていた。そう感じる事が出来た。でなければあんなことは言わないだろう。

そう、私の頭はちゃんと理解していた。

しかしそれとは別のところで、私は今回のことを誰かに説明して欲しかった。目の前にいるという理由だけでおじいさんを責めて、罵ってしまいそうだった。

だから私は口を噤む。おじいさんが黙ったように私も黙る。

なぜか私には、この沈黙がおじいさんの精一杯の気遣いのような気がしていたから。

だからしばらくの間、私に余裕が無かったこともあって、その沈黙はまったく苦にはならなかった。むしろ気持ちを整理をする時間を与えられたように感じて感謝すらしていた。

しかし、その状態がだんだん長くなるにつれ、次第に沈黙が苦痛となつてのしかかつてきた。

この沈黙は私が打破しなければならぬのだろうか。私は頭をテーブルに押し付けたまま考えていた。

頭を上げるタイミングを完全に逃してしまっており、焦りばかりがどんどん大きくなる。

さらにその上、先ほどまでのすっきり気が抜けてしまっていた、年甲斐も無い姿をおじいさんに見せたことも気になってきた。

いくら相手が自分より年上であってもあまりに恥ずかしい。こんな姿では、私が普段自制するよう心掛けているとはとても思えないだろう。

時間だけが無常に過ぎる。

結局さんさん逡巡した挙句、出来るだけ当たり障りの無さそうな日常の話題を選ぶことにした。

「そつといえば日本語お上手ですね。ここの言語ってこれなんですね。言葉が分かって良かったです」

躊躇うと余計に辛くなる。覚悟を決めておじいさんに視線を合わせるように顔を上げる。しかし、

「君が魔力を使っている」

思い切り自爆した。おじいさんの言葉に再び固まる。

今この人は何を言った。しばらく考えてみたが結論を出せず、恐る恐る聞き返すことにする。

「もう一度お願いできますか？」

「魔力だ。魔法を使うための力だ。君が使っているものだ」

おじいさんはきっぱり答えた。

「いえいえいえ。使ってませんよ、使ってません。百歩譲っても私じゃありません。私にそんなものは使えません」

魔力って何だ。漫画の中の話か。それを私が使っているというのか。

意味を理解して、いきなり再起動する。おじいさんの顔を見ながら、力いっぱい否定した。

何を言い出したのかと思った。

「魔力だ。われわれの言語は違う。君が魔力で翻訳している」

「私はそんなもの知りません！」

私は首を横に振りながら叫ぶように反論した。何を言っているんだ、この人は。魔力とか、それはどんなファンタジーだ。私はもうすぐ三十歳になるんだ。今更そんな話には付き合えない。それはもっと若い子にやってくれ。

「知っている、知らないでは無い。使っていなければ私たちは話が出来ない」

「ええとほら、実は同じ言語だったんですよ。便利ですね、良かったです」

「別の言語だ」

嫌になるくらい冷静な言葉。つられて私の勢いも落ちる。

「おじいさんが使っているとか」

「確かに私にも出来る。だが今使っているのは私では無く君だ」

どさくさ紛れに、またおじいさん呼びしてみる。今度はおじいさんも流した。そして負けるな私、流されるんじゃない私。

「私のところには魔力なんてありません」

「君の世界に魔力があったかは知らない。だがこの世界には魔力があり、魔術がある。魔術は魔力を使うためのものだ」

説明されても困る。私は納得したくない。

「魔力というのは世界の祝福だ。この世界に生きるために必要だから授けられるものだ」

私は一度きつく目を閉じ、ゆっくり開きながら聞いた。

「ここに来たことによって、私に魔力が授けられたって言うんですか」

「そうだ」

おじいさんは深く頷いている。何となく分かる。だけど私はおじいさんの顔が見たくなくて俯いていた。

「魔力があるなら誰かが魔力で私を連れて来たんでしょか」

「この世界には魔力があっても、君の世界に魔力が無ければ道は開かない。そして、たとえ魔力があっても君の世界で魔力を使うものがないければ繋がることは無い」

それは帰れないってことか、そう思ってしまったけど口には出せなかった。

「そしてこの屋敷には私の術がかかっている。この世界に私の術を破ってこの屋敷に侵入できる人間はいない」

すごい自信ですね、自信家だったんですね、おじいさん。

だけど、そこまで言って、言い切って、そこで言葉が途絶えた。

今まで強かったおじいさんの様子が変わった気がした。逡巡するよ

うな雰囲気を感じる。迷うような人では無さそうだったのに。

何があったんだろうと私はのろのろと顔を上げた。

おじいさんは今までで一番大きく息を吐き、眉間のしわもさらに深めた。そして強く強く私を睨んだ。

「君には魔力がある、この世界の誰より大きな魔力だ。術の使い方は私が教えてやっても良い」

私には何も答えられなかった。理解することはもちろん、考えることも辛い。

「ここに居ても良い」

独り言のような言葉が聞こえる。

「一階は私の部屋だ。二階から上は物置だ。好きにしろ」

見えない道

疲れきっていたらしい私は、いったん休ませて貰うことになった。

あらゆることに迷いまくった私が、すっかり考え込んで動かなくなっってしまったからだ。

新しい情報に納得することも出来ず、何を聞いたら良いのかも分からない。今までは半ば勢いで会話を繋げていたので、一度途切れてしまつと次の言葉も出て来なくなつた。

おじいさんのせつかくの申し出にも、私は御礼の気持ちすら返せてはいない。

ここが本当に私の知らない世界だとしたら、おじいさんの申し出は非常にありがたい。まさしく渡りに船で、これ以上無いくらいの幸運だろう。わざわざおじいさんが言い出してくれた。助けてもらつたほうが確実だ。

しかし、そんなに簡単に決めてしまつても良いものなのか。知らない人のお宅に居候、ものすごく敷居が高く感じるのは気のせいでは無いはずだ。どう考えてもご迷惑である。

けれども、ここでお世話になつたほうが良いことも確かだ。おじいさんに縋らず出て行つたとしても、私には何をしたら良いのかすらはつきり分かつていないのだから。

だけど、このままお世話になるなんてあまりに負担をかけることにはならないだろうか。知らない人間を自宅に迎え入れるなんて普通

出来ない。私が役に立てることなんて高が知れている。

まったく考えがまとまらない。結局時間だけが過ぎていく気がする。慎重に決めるべき問題であることは確かだった。しかし疲れきっているせいなのか、いつも以上に次から次に否定の意見が浮かんでしまふのだ。否定の次の否定だ。

私自身が何をしたいのか決まっていないうせいで、自分を納得させることすら出来ない。こんな状態で大事なことを決めたら絶対後悔する。

頭を抱えて再びテーブルに突っ伏したくなった。

その瞬間だ。おじいさんがいきなり無言で席を立った。

驚いた私は、とっさにおじいさんに向かって手を伸ばしていた。

おそらく自分でも無意識のうちに、まだ聞きたいこと納得出来ないことがあると思って引き止めようとしたのだろう。伸ばしてしまっ
てから、今までさんざん黙っていたくせに、と自分自身に苦笑い
が浮かびそうになった。

私自身に時間の意識は無かったけど、待たされるほうからしたらと
てつもなく長い時間だったはずだ。社会に出てからは避けていたと
はいえ、今は取り繕うことすら忘れていた。いったいどれだけの時
間、おじいさんを付き合わせていたのだろう。

ただどそのまま部屋に戻ってしまうのかと思ったおじいさんの行動
は違った。テーブルの上の食器を集め始めたのだ。

「す、すいません」

おじいさんの姿に、慌てて片付けるのを手伝おうと立ち上がる。しかし何しろ数が少ない。私が立ち上がった時には、おじいさんはすでにそれらを持ってきた部屋へと向かっていて、思わず後ろを付いていきそうになった。

傍で私を見ていたおじいさんには、すでに私の許容量が限界を突破していることが分かったのだらうか。それとも今はこれ以上聞いても受け止められないだらうと判断したのだらうか。

あまりにもタイミングが良すぎた。願わくば、こいつにこれ以上説明をしても無駄だと諦められたわけではないことを祈る。

私は自分のあまりの情けなさに全身の力が抜けそうだった。すごく申し訳ない、蹲りたい。

「今日は休め」

ぶつきらぼうな声が聞こえた。すぐに戻って来たおじいさんの声だった。

水音もしなかったのです、どうやら食器は置いてきただけだったらしい。

しかし戻ってきたおじいさんを一目見て、私はさらに申し訳なくなつた。疲れていることがはっきり分かったからだ。

おじいさんは今まで、ずっとときつい眼差しをしていて、年齢からも

服装からもとても考えられないくらいその行動はきびきびしていた。それこそ、これがこの人のいつもの行動なんだろうなと判断させるくらいに。

しかしそれが、今は目は半分閉じているような状態で、体全体も僅かにふらふらしているような気がする。何となく気力だけで眠気をかバーしているのが察せられる。おじいさんこそが蹲りそうだった。

私がこんな状態のおじいさんを付き合わせていたのだと思うと、罪悪感すら湧いた。

「私も寝る」

確かにおじいさんの言葉が何よりの最善に思えた。

私は大人しく荷物を抱えあげると、おじいさんの指示に従うことにした。テーブルのあった部屋の正面のドアから出て階段に向かう。

おじいさんは部屋に引き上げる前に、私に簡単なこの屋敷の構造を教えてくれた。しかしかなり眠かったようでさらにふらふらしてきていて、そのため説明はかなり省略されることになった。

私は眠そうなおじいさんには申し訳なく思ったが、とりあえずお手洗いのことだけは詳しく聞き出しておいた。これだけは後回しには出来ない。今聞けなければ、後で家中を探し回るか、おじいさんを起こしにいくかを選ばなければいけない。

妙なところで現実的な私が、自分自身不思議でおかしかった。

二階の構造は教えてもらえなかったので、適当に目に付いたドアに

そのまま入る。ベッドのみを目印にひたすら探す。それがあんなに
で十分だったので、それ以外の内装のことなどを気にする余裕なん
てなかった。

幾つめかの部屋で見つめた時はすでに限界だった。荷物を放り出し
てベッドに潜り込む。

気持ちの浮き沈みのせいかな非常に疲れていたのもあって、細かいこ
とは気にしなくても良いように思えた。コートと上着は脱いで荷物
の上に置いたが、スーツは上着以外脱がずに寝た。

でも結局その後ストッキングは結局気になって脱いだ。しかしそれ
だけだ。

僅かに埃っぽいベッドを叩きもしなかったし、部屋の内装を確かめ
る余裕も無かった。目に付いたベッドに潜り込んだだけである。

ここに一人

夢も見ずに寝ていたと思うのだけど、暗闇に包まれかけた部屋で一度起きた。カーテンの引かれた窓際がうつすらと明るく見える。

一瞬ここがどこだか分からなかったけど、取り乱すことも慌てて起き上がることもなかった。ぼんやりと光を見つめながら、暖かなベットの途中で次第に記憶がよみがえるのを待っていた。

時間の感覚がまったく無いので、今がいつなのか分からない。この世界の朝方に眠ったと思うのだけど、あの時から日付が変わっているのかすら曖昧だ。携帯を確認すれば分かるのだろうけど、何故かあまり興味が湧かない。

お手洗いへと壁などを伝いながらゆっくり下りて行ったら、おじいさんもちょうど起きていたようだった。最初に私がおじいさんと遭遇した、あの部屋に入ろうとしている後姿を見つけた。

あの部屋はとても快適に眠れるような場所ではなかったけど、その先にも寝室があるのだろうか。

おじいさんはあの灰色の上着では無く、やっぱり丈の長い、しかし色は白の服を着ていた。今度のは間違いなく寝巻きに見える。

そしてまだ休息が足りていないようでふらふらしていたので、声を掛けることは出来なかった。おじいさんが部屋に消えるのをぼんやり見送った。

私は二階に上がるとまたベットに潜り込んだ。まだ眠い。

次に目が覚めた時は、周囲はすでに明るかった。カーテンだけでは抑えきれない光が漏れていて、部屋全体も見渡せるほど明るくなっていた。

真つ先に目に入ったのは淡い桜色の布の海で、幾重にも重なって美しいドレープを描いている。その先には派手ではないのに一目で豪華だと分かる、素人目にも立派過ぎる彫刻を施された棚も見えた。

私はやけに肌触りの良いシーツなどと一緒に、気付かない振りをすることにした。

気付かない振りをすることが出来ないのは、いがらっぽい喉とくしやみの出そうで出ない鼻だ。持て余してぐずぐずさせる。

だけどそんな状態でも、私は直ぐには起き上がらずベットの途中で昨日のことを思い出していた。

はつきりとはしないがおそらく昨日であっているはずだ。こんなに明るいし、現在は睡眠が十分取れたことから満足感すら感じている。便宜上昨日ということにしておく。

自分を納得させてから、昨日の行動を順番に思い返していく。おそらく今の状況にはまるで関係無い、朝食に作った献立や受けた会社の面接内容、買い物に寄ったスーパーでの行動のことまで反芻する。しかしそれで得られた情報は、昨日が特におかしなことの無い、日常の中に埋もれてしまうような一日だったということだけだ。

昨日起こったおかしなことは、すべてこの家に入り込んでしまった

ときから始まったのだ。

この家に来てからは、おかしなことが山積みだった。

三つの月が浮かぶこの場所のことはもちろん、時間のこともそうだ。いつの間にか昼が夜になっていった。私が家に帰ったのは確かに日中だったのにも関わらず、ここでは夜になっていたのだ。

今日はとても良い天気で、今の季節としては薄手の上着と春物のコートで調度良いはずなのに暑いくらいだった。私は家に帰るまで、早く着替えたいとそう思っていたはずなのだ。

真昼だった日が落ちるほどおじいさんと話し込んでいたわけではないと思うし、だけどそれを認めてしまうと、ここでは時間の流れすらもおかしいということになってしまう。

最初に外に出たときは、月があまりに自然にそこにあっただのでまったく意識していなかった。というよりも私の意識は月と花畑に持っていかれていて、そこまで考えてなんていらなかった。

私をもっと周りに対して注意を払っていたらこんなことにはならなかったのだろうか。私は何に対して気を付けていれば良かったのだろうか。

うっかりすると思考がループしそうになる。

結論が出ないまま今日が終わりそうだ。私の思考が空回りし始めている。

もともと私には頭の中でさんざん考えてから口に出す習慣があるの

で自覚はしている。今はどうして自分がここに居るのかの自問自答が繰り返されている。

ちなみに考えすぎるほどに考えても、それが役に立つかどうかはまた別問題である。私の思考は迷宮に似ていて、出口となる答えを探してもものすごく右往左往するのだ。

あっちこっちに脱線するため、うっかり最初の疑問とは違う問題の答えが出ていたりするときもある。

そしてあくまでも、それらすべては私の頭の中だけで行われているので行動には出ない。表面上の私はその間も必死にその場を取り繕っている。口に出すこともまず無いため、今まで私は親しくない人には無口だと思われていた。

人に頼るのは、大人になると皆自然に少なくなると思う。しかし私は特に抵抗がある人間なのだ。人に頼るのも相談することもよほどのことでも無い限り出来ないので、自分で結論を出すしかない。

ちなみにしないのではなく出来ない。理由は簡単だ、恥ずかしいから。いい大人のくせに理由はそれである。そのせいで余計人には言えない。

これは仕方のないことだった。普段は取り繕ってるけど、私は限度を超えると赤面してしまうのだ。三十歳近いおばさんの真っ赤になった顔なんて誰も見たくないだろう。何より私が見せたくない。今では自分で考えて自分で答えを出すのは日常になってしまった。

ふとおかしくなった。こんなときでも変わらない自分の思考にひとしきり笑った。笑えた。

そして今まで布の海の中で泳がせていた目を閉じる。だらりと伸ばしていた手足も抱え込むように小さく丸めて、頭の先まで毛布の中に潜り込む。

私は決めなければならない。昨日聞いた話のこと、おじいさんのこと、私が何を信じるのかを。

おじいさんと顔を合わせる前に私自身が納得しなければ、昨日に二の舞にしなければならないのだから。

自分自身で考えて気持ちにけりを付けなければならない。

朝日の中

窓の光がだんだんと力を増していくのを見守りながら、私は何とか自分の気持ちに区切りをつけた、ことにした。

ベットから起き上がると、しわになったスカートとシャツ、適当に放り出したせいで変な癖の付いているコートと上着、とりあえず纏めて置いたと分かる荷物が目に入る。

嫌でも目に飛び込んでくる豪華な内装は、丁寧に見ない振りをした。荷物に近付くと真つ先に鞆から携帯を取り出し、祈るような気持ちで画面を開く。そして分かっていたはずの圏外の表示に、またショックを受ける。

しばらくそのまま睨んでいたのだけど、画面が暗くなったところで視線を引き剥がした。

そのまま携帯自体の電源も落とす。こちらでは携帯を充電することすら出来ないのだから、もしかしたらを考えて使用できる状態にしておきたかった。

本当は持ち歩きたかったけど、このスーツの隠しは胸元の一つのみだ。そんなところに入れたら変に目立つし、コートを着ていくのもおかしいだろう。

表面を一撫ですること諦めてまた鞆に戻す。今さらだけど自分の鞆があつて本当に良かった。

A4の書類も楽に入る、この大振りの鞆の中には色々なものが入っている。特にマジックやのりが入ったペンケース、櫛や鏡、爪切りまで入った化粧道具のセット、針や鋏の入った簡易裁縫セットは有り難い。

欲を言えば切りがないが、これが一緒だったことだけは幸運だったと言えるだろう。

買い物袋はゴミが少し気になったけど口もきっちり閉じているし、もう一つの袋に入っている食品にも生物は無い。このままにしておいても大丈夫だ。

しかし、荷物を暢気に確認していた私はそこで大事なことに気付いた。

私には何よりも早急にしなければならなかったのだ。慌ててベットに戻ると毛布ををひっくり返す。

何と私は昨日、化粧を落とさないでそのままベットに横になってしまったのだ。

色落ちしていないかを焦って確認する。おじいさんは好きにしろと言っていたけど、こんな高級そうな寝具に化粧汚れをつけるなんて怖すぎる。洗って落ちるものだろうか。

しばらく持ち上げたり、ひっくり返したりして確認をしていた。

しかし、どうやら落ち難い化粧品を使っていたことが功を奏したのか、ベットに目出つような汚れは無いようだった。淡い色合いのシートもカバーも、滑らかな光沢を保っている。

朝から一気に疲れ、今度は気が抜ける。

しかし安心したところで休んでいるわけにはいかない。ふらふらしながらも化粧道具のセットを持って、身支度を整えるために水場へ向かう。

しかしそこでまた、化粧を落とした状態で私は考え込むことになる。化粧をしてしまったって良いのだろうか。

ここに持って来れたのは化粧をするためというより直すためのもので、普段使っている化粧品の一部でしかない。一応これだけでも何とかすることは出来るけれど、使用すれば当然減るのであくまで限りがある。というか、ここで新しいものを手に入れることは出来るのだろうか。

しかし化粧をしないで人前に出るなんて、考えるだけでかなり抵抗を感じるのも確かだった。おじいさんだけだつて人前だ。本音を言うなら流れ作業的に化粧をしてみたい。

くだらないことかもしれないけど切実だ。

地味に悩む。悩みまくる。

しかし、私は結局化粧をするのを止めた。

今は何とか出来てもこの先がどうなるか分からないのだから、これが正解のはずだ。先延ばしにすればするほど苦痛になる。化粧品のことなどでおじいさんを煩わせる可能性を考えれば我慢出来る、は

ずだ。納得出来るだろう、自分。

何となく後ろ髪引かれるような思いを残したまま、のろのろとそこを離れて一階の階段のある場所へ向かう。

この場所は玄関というかロビーのようになっていて、その上大きなドアの横にはガラスの入った窓がある。外の様子を見ることも当然出来る。

私は外の様子をきちんと確認したかった。

昨日は呆然としていて一部の風景しか見ていなかったし、朝はバタバタしていて窓のカーテンすら開けていない。おじいさんが起きて来る前に、少しだけでも周囲を見ておきたかった。

確認だけしたら食堂に戻っておじいさんを待つことにしようと思う。

ロビーに出て窓を覗くと、豊かな自然のみが広がっているように見えた。人や動物の姿は無い。

少し躊躇した後に、結局好奇心に負けて迫力のある大きなドアを引く。

それはこの家で見たドアの中で最も立派で豪華なものだったけれど、大きさからはとても考えられないほどの軽さをしていた。外に出ることはせずに、何の抵抗も無く開くドアをゆっくりと引いていく。

そこからは、しっかりとした柱がある石床の玄関ポーチと、どこまでも続くような深い森、そしてすっきりと晴れ渡った空が見えた。

外はラジオ体操でも始めたいくらいの良い天気だった。この位置からは太陽は見えないが、薄く小さい雲のみが僅かにぽつんと浮かんでいる。見事なまでの快晴である。

空を見上げるようにして、胸いっぱい酸素を取り込む。

どこもかしこも締め切っているこの家に対して、どうやら私は妙な息苦しさを感じていたらしい。

こんな日に洗濯物を干せたら最高だろうと思つと笑みも浮かんだ。

「獣がいる。この屋敷の周りは大丈夫だが、離れると食われるぞ」

しかし完全に力が抜けた状態のところ、物騒な声が掛かった。

飛び上がりそうなくらい驚いて、悲鳴を飲み込んだせいで引きつった顔のまま勢いよく振り向く。

「お、おはようございます・・・」

昨日と同じように、床に付くほど長い灰色の服を着たおじいさんだった。

内容よりも急な驚きゆえに、私の心臓がもの凄く不自然な速さで鼓動を刻んでいる。

心臓の上に手を置いてそれが抑まるのを願いながら、声が震えないように注意して問い掛けた。

「獣・・・。狼とかですか？」

「狼もいる。他の種類もいる」

おじいさんの眉間にはすでにしわが寄っている。一晩明けて改めて確認した顔色も、特に良くはなっていない。この人は常にこんな感じなんだろうか。

しかし私の頭は、昨日に比べ格段にすっきりしているように思う。これならちゃんと話をすることも出来るだろう。

食堂へ向かったおじいさんの後を追うため、急いでドアを閉めながら私は思った。

「これからどうする」

覚悟を決めておじいさんに話を切り出す。昨日散々な姿を見せてしまっているの、本日は出来るだけ注意しよう。

ただし、お礼の言葉から始まった私の話は直ぐに遮られることになった。おじいさんの気に食わないの一言によって、いきなり話がストップする。

昨日は私があんな姿を見せてもスルーしていたのに、いったい今日はそれを上回るどんな問題があったと言うのだろうか。

「話し方が間愈っこしい」

どうやら私の話し方に問題があったようだ。

しばらく説得を試みたのだけど何を言ってもおじいさんは譲ってくれず、結局私が尊敬語を丁寧語にまで落とすことによって決着した。せっかく決めた覚悟も何となく萎んでしまい、戸惑ったまま話を続けることになった。

「魔力つて、どうやって勉強したら良いんでしょうか？」

「魔力を学ぶ必要は無い。君はすでに使っている」

何か変なことを聞いた、やる気もいきなり頓挫する。

思い出せば、確かに昨日おじいさんはそんなことを言っていた。

ただし、私には魔力なんてものを使っている自覚は無いので困惑することしか出来ない。というか、今だ魔力に対して半信半疑なのだ。しかし学ぶことによって、いつか帰れるのではないだろうかという期待はある。可能性に賭けるためにも、とりあえず話を先に進めよう。

「では私は何をしたら良いんでしょうか？」

「術式の構成だ」

おじいさんはすでに眉間にしわを寄せていたが、私の眉間にもしわが寄る。

「昨日は確か、魔術は魔力を使うためのものだって言っていましたよね」

「魔力のある存在の多くは、誰に教わらずとも自分で力の使い方を知っている。だが術式を使うことによって、同じ魔力でもより大きな力を制御出来るようになる」

「私も魔力の使い方を知っているってことでしょうか？」

「そつだ。無意識だとしても、魔力が私に声を届けたいという思いに反応して作用した」

ちよつと聞き捨てならないことを聞いた気がする。

「無意識にとか危なくはないですか。魔力って他のことも出来るん

ですよね」

「だから学べ。理解が進めば制御出来るようになる」

それはつまり危ないってことですよね。

ひょっとしなくても、今の状態のままだと他の人が居る場所に行くのもまずいんだろうか。

「何をすれば良いんですか？」

「本を読め。文字も言葉と同じように理解出来ているはずだ。分からないことは聞け」

「一から十まで教えるつもりは無いということですね、おじいさん。そういうえば、

「おじいさんは何をしているんですか？」

「私は研究をしている。この召還具をやる。私が研究しているときはこれを使え」

そう言うと、銀色に光るものをテーブルに置いた。

手には何も持っていないようだったのに、これはどこから出したんだろうか。

「これは何でしょうか？」

「召還具だ。魔力を込めて呼べば力あるものに届き、現れる」

何が現れるんだろう。現れたものが助けってくれるっていうことで良いんだろつか。というか研究中は教えてくれないんですね。

光るものに手を伸ばし持ち上げてみる。それは銀色をした幅広の輪っかだった。

見た目は完全に鈍い光を反射する金属で、触れた感じも金属そのものである。なのに金属の重さを想像しながら持ち上げた私が拍子抜けするくらいに軽かった。

直系が15cmくらいで、幅が2cmくらい。繋ぎ目が無い完全な円を描いていて、はみ出そうなくらい大きな赤い宝石が付いている。濡れたように光る銀色にも人を惹きつける魅力があった。

ただし中途半端な大きさである。腕輪とするには大きく、繋ぎ目が無いのでチョーカーのように首にするわけにもいかない。持ち歩かないように思える。

しかし、それら全てよりも気になることがある。

「すごい高そうなんですけど・・・」

「そうでもない。その召還具にはすでに術式が組み込まれている。後は願うだけだ」

言葉一つで流された。

これに付いている宝石はとてガラス玉には見えないので、無くしたり傷付けたりしたら大変なことになりそうである。だけどこれを

受け取らないという選択肢は私には無さそうだ。管理には十分気を付けることにしよう。

私は自分を納得させるために大きく頷いて、おじいさんにお礼を言った。

おそらくこれがあれば、私にも勉強を補佐してくれる誰かを呼ぶことが出来るのだろう。おじいさんはこちらのことに不慣れな私に気を使ってくれたのだ。

間違っても自分が全て教えるのが面倒だと考えたわけではない、はずだ。

「私にそんなことが出来るんですか？」

「出来る。大きな魔力があれば出来無いほうがおかしい」

知りませんよ、そんなこと。ちょっと嬉しかったのをいきなり落とされて微妙な気持ちになった。

「どうやって使えますか？」

「腕輪だ。今の状態なら勝手に魔力が取り込まれるので、腕にはめて呼ぶだけだ」

どう見てもこれは私の手首の何倍もの太さがある。確かにこの中に手をつ込むことは簡単だろうけど、明らかにすっぱ抜ける太さである。どうしようこれ。

「腕を入れる」

これをはめたまま行動するのは大変だと思う。

しぶしぶ腕を入れた。

するといきなりきゅっと絞まった。金属なのに私の手首にぴったりフィット。

驚きは言葉に出なかった。

悲鳴は上げなかったと思うけど、それは驚かなかったからでは無い。驚きすぎて言葉が出なかったただけだ。たっぷり数秒は鳥肌を立てて固まった。

持っていた時には、重さはともかく金属のような硬さが確かにあったのに、今のこれは違う。不思議なほどの弾力がある。テーブルと同じように、というかそれ以上におかしい、硬いのに柔らかい不思議材質だ。

恐る恐るおじいさんを見ると、大きく頷いていた。そして満足げに教えてくれる。

この腕輪にはそういう術式が組み込んである、らしい。はめたい時、抜きたい時には思うだけで広がり抜ける、らしい。

思わず直ぐにでも外したくなった。痛くはなかったがそういう問題ではない。

魔術って何でもありだ。おじいさんの顔を疑視してしまう。なぜ私がこの世界に不慣れだと知っているのに説明してくれないのだろう。

投げ捨てなかつた私は褒められても良いはずだと思う。

私は恐る恐る自分の手首を見る。正確には手首にはまっている腕輪を。これも可能性なのだ。

「だが、その前に大事なことがある」

おじいさんは改まって私に向き直った。私も腕輪に向けていた意識をおじいさんに戻す。

「私に師事するなら、その呼び名を改める」

「分かりました、先生」

密かに気にしていたようだ。諦めたわけでも、慣れたわけでもなかったのか。

111で二人

話に句切りがついた思ったのか、そこで先生はまた食事を出してくれた。ちなみに昨日と同じメニューだ。せつかくの食事なので頂いた。

スープは昨日のものより少しだけ濃くなっていて、具も少しだけ増えている。きつと昨日のスープは、先生にとっても薄かったんだろう。

しかしその食事は、私に一つの決意を固めさせることになった。

「こちらにお世話になっている間は、食事を作らせて下さいね」

食事を終えてから先生の顔を見て伝える。

お願いではなく、決定事項としてこれだけは譲れない。たとえ先生が家の中を弄られるのを嫌だとしても、たった二度の食事で複数の理由を見つけてしまった。ぜひ食事に関してだけは譲歩してもらいたい。

特に、おじいさん先生に出される食事を、ただ食べるだけの居候私の図・・

凄くシユール。考えるだけでも心が痛い。私にはそんな生活はとて
も耐えられない。

これは大事なことだ。

表面上では平静を装いながら、しかし実際にはかなりひやひやしながら返事を待つ。

何がおじいさんの導火線に火を点けるか分からないので非常に困る。手探りで話を進めるしかない。下の物には一切触れるなどか、言われてしまったらどうしたら良いんだろう。だけど昨日は上の階のものには好きにしろと言っていたし、何とかなると信じたい。

「好きにしろ」

非常にあっさりとして、同じ台詞で許可が出た。

良かった。本当に良かった。

自然と力の籠っていた肩の力を抜いて、ほっとしながら空になった食器を見る。

私は特に食通というわけでも無いし、偉そうに他の人を批判できるほど料理の腕が際立っているわけでもない。

しかし、そんな私から見ても昨日の食事も今日の食事もかなり寂しかったのだ。

なんといっても、湯気の出ていたあのスープもこのスープも、スープとしてかなり薄い。

暖かいということだけでもかなり嬉しくはあったのだけど、特に昨日のスープは味がほとんどしなかった。今日のスープも昨日のものよりは少しだけ濃くなっていたけど、それでもまだかなり薄く感じた。

具も昨日よりは増えてはいたけど、あくまでも昨日と比べてという状態である。たぶんベーコンみたいなものと野菜みたいなものだと、やっと分かるほど細かいものがほんの僅かに入っているだけだ。

このスープは、調味料を少なくして野菜などの旨味を味わう料理では無く、単純に薄いのだろう。いくらおじいさんで薄味が好きだったとしても、これではちよっと薄すぎるだろう味だ。

ただ、もしかしたらこのスープ、もとはちゃんとした料理だったのかもしれないと思う。先生は昨日の食事も今日の食事も直ぐに用意してくれた。もしかすると何度も足したり加えたりして、あれやこれになっっていたのかもしれない。

そしてスープと一緒に出ていたパンも、かなり硬く感じた。

このパンは黒パンのような色で少し酸味がある。痛んでいるわけでは無くこういう物だとは思っただけど、ひよっとしたら保存食じゃないのか、これ、と思うぐらい硬い。

いや、正直に言おう。このパンを食べるのにとっても苦勞しているのだ。最終的にスープに浸して食べたのだけど、スープ自体に味がほとんど無いのでちよっと悲しいことになった。

だけど居候の身で食事に文句を付ける訳にはいかない。しかしあのスープだけでは体が持たないのも分かっているので、パンを食べないわけにもいかない、けどかなり厳しい。

ジレンマである。

そこで、食事の用意をするということになれば、ここの食文化も分かるのではないだろうかと考えたのだ。もう少し食べやすい物が入るのでは、という期待もある。

くだらないと言うこと無かれ。食は人間にとって基本なのだ。これが定まらなくては先に進めない。

ちなみに居候する、そして勉強をするというのは、私の中ではすでに決定事項だ。

なぜならここには日本が無い、地球が無い。なのに魔力なんていうものは存在する場所だというのだ。それはつまり大使館もサービスセンターも無いというのに、私にはここでの一般常識すら無いということになる。

生きるためには知識が必要だ。

どんなに否定しようとしても現実是不変ならないのだから、もう逃避は止めるべきなのだ。ここを受け入れて生きていく方法を考えなければならぬ。

おじいさんが知らないだけならここを飛び出しても良いかもしれない。知ってる人を探すほうが賢いのもかもしれない。

魔力のこともそうだ。おじいさんは魔力なんてものがここにはあるのだと言い、私が使っているのだと言う。私には皆目見当が付かないものを私が使っている。

普通ならとても信用できない。嘘を言うなど、怒っても良いぐらいだ。

ただどどんなにそう考えようとしても、昨日の月がここは違う世界だと否定する。

あの月にはCG等とは違う、圧倒的な美しさがあった。あれはスクリーンに映った映像などでは無く、紛れも無い本物であると、今までとは違う世界だと私自身が納得してしまっていた。

ここが違う世界だとしたら全てを否定する術を私は持っていない。

だとしたら闇雲に飛び出しても何も出来ないのは間違い無いだろう。死んでしまうことすらあるかもしれない。

そして私には、おじいさんに何を言われても家に帰ることを諦められない。諦められる訳が無い。ならば知識を得るのはきつと無駄にはならないはずだ。

朝、目が覚めてからベッドの中で、私は自分で結論を出していた。

何がどうして

私は先生にいきなり放置されてしまったしまったため、食堂の椅子に座ってじっと考え込んでいた。

ちなみに先生は今何をしているのか？

答えは研究のまとめ。先生が倒れる原因になった、というより倒れるほど集中していた研究のまとめをしている。

実は先生があそこで倒れていたのは、研究に夢中になりすぎて時間の感覚を忘れていたかららしい。食事や睡眠も全てを後回しにしてその研究に取り組んでいて、そしてその結果を得たことに満足してあんな状態で倒れることになったらしいのだ。

出来れば知らないでいたかった情報である。

しかし今重要なのは、先生がその研究結果をきちんと把握しているも、その過程を書類にまとめるようなことはしていなかったということなのだ。

私はあの後、料理のことを了解してもらえたことにほっとしながら、先生と一緒に立ち上がった。てっきり台所の使い方を教えてもらえると思っていたのだ。

だけど、先生にとってこれからの行動の優先順位はすでに決まっていたらしい。

先生は突然研究の続きがあると宣言すると、簡単に現在の研究の説

明などをして、あつという間に閉じこもってしまった。

ちなみに私には、その研究の内容を理解することは出来なかった。

私に理解出来たのは先生がその研究にいかに関心をかけたのかと、そのために先生がどれだけ不摂生な生活をしていたのかである。

他に分かったことといえば、先生が倒れていたあの部屋が研究室で、その奥の、私が出口かと思って覗いたドアの先がまとめものなどをする書斎だったということだけだ。どうやら先生はそこに籠っているらしい。

私も慌ててこの後の行動を確認しようとはしたのだけど、残されたのは好きにしるの言葉だけだった。

研究が終わればまた質問に答えるとは言ってくれたけど、それがいつになるのか、はっきり言ってあの先生の様子を見る限りまったく分からない。何しろ先生からは、研究にすべて捧げているような研究者タイプのおいを感じるのだ。

そんな訳で、私は食堂にぼつんと座っている。出来ればこれから何をすれば良いのかの指針くらいは欲しかったと思う。

そこら中に放置されている本を、いくつも手に取って確認してみた。確かに、何故か知らない文字なのに読むことだけは出来た。

ただしそれだけだ。はっきり言って内容はまったく理解出来ない。おそらく私には基本が抜けていて、これの前に読むべきものが山とあるのだ。

待っているだけなので時間の無駄だし、何をすれば良いのかも分からない。闇雲に手をつけて事故でも起こしたら目も当てられない。私にはこの常識が無いため、一人で放置されてしまうとなんか何かがして良いことなのか、拙いことなのかの判断が付かない。

自分で考えたことなのに自分にダメージがきた。とりあえず非常に困っていることは確かだけど情けない。

「先生、私はまだこれの使い方すら自信がありません」

私は先生が渡してくれた、どうやら私を助けてくれる何かが見え、らしい召還具を見ながら呟く。空気に溶けてく自分の声が虚しくて椅子にぐったりと体重をかける。

しばらく左腕に付けた召還具を睨んでいたが、このままでは何も解決しない。

こうしている間にも刻々と時間は過ぎていくのだ。このままではお昼になってしまうし、とりあえず私は精霊を呼び出してみることにした。

この召還具にはもうすでに驚かされているため、かなりの逡巡の末の決意だった。

朝のことを思い返すと、使うのに更なる躊躇いが生まれる。あの時はあまりに驚きすぎていてそれどころではなかったのだけど、もっと詳しく確認しておくべきだっただろうか。

これはあんなことが普通におきる腕輪なのだ。地球の常識は通用しない。やっぱり最初の一回くらいは先生の前で行なうべきだろうか。

しかし私は子供では無いのだから、頼りっきりの生活を送るなんてわけにもいかない。これからの生活、そんな調子で乗り切っていけるのか。非常に簡単な方法しか教えてもらえなかったけど、先生は確かに呼ぶだけだと言っていたのだ。

覚悟を決めて、今まで見つめていた左手首の、腕輪の赤い宝石の上に右手をかざす。

いったい何が出て来るのだろう。軽い感じで先生が渡してくれたから小さな動物とかだろうか。魔法使いといえば基本は猫だろう。注意事項などは一切無かったので、危険な存在では無いと思う。

もし失敗してしまった時には、呼んでみたけど駄目だったと正直に伝えよう。何か壊すようなことにはならないだろうし、呼ぶだけだと言っていたのは先生だ。きっと許してもらえる。

「出て来い、出て来い」

優しく声を掛けてみたけど腕輪に反応は無い。

座ったままだと、何か間が抜けている気もしてきた。これでは駄目なのだろうか。

眉間にしわが寄った。私は平常心を心掛けながら椅子から立ち上がり、足を肩幅ほどに軽く開いて大きく深呼吸する。

とりあえず腕輪に何かをを込めるつもり、気合でも入れるつもりになって、力を込めて呼んでみようと思う。具体的なやり方は知らないのだから出来ることはしてみよう。

漫画か何かで精霊を呼び出す呪文であっただろうか。それとも日曜日の朝の魔法少女の掛け声を上げてみるべきか。あっこちゃんやサリーちゃんの呪文でも許してもらえらるだろうか。

他に私が知っている呪文なんて、ずいぶん昔のゲームくらいしか無い。ただしその場合、残念だけどファイアやサンダーなど、そのまの効果がある攻撃以外の呪文の内容は分からない。

そんなことを考えていたからか、なかなか集中できない。

しばらくその体勢でいた。

だけど次第に、恥ずかしくもなってきた。もう諦めてしまっても良いだろうか。

しかし手を下ろし、体の力を抜く寸前に、声が聞こえた。

「呼んだかな？」

そして本当に出てきた精霊っぽい。ただし人型、どう見ても人間に見える。

知らない存在

気が付いたら目の前に居た。

伸ばしてもいない手が触れそうになるほど、本当に直ぐ目の前に現れた。私はパーソナルスペースが比較的広い人間だけど、そうでなくてもこれほど近くに居られたら焦るだろう場所だ。

私自身は思わず何歩か後ずさっていた。あえて言うなら、人前での気合を入れた体勢で固まらなくてすんだことだけが幸運だ。

私は先生が軽く遣したものだからと油断していたのかもしれない。あれほど逡巡して決めたにも拘らず、その覚悟はもろくも崩れ去っている。

再び悲鳴を上げるのではなく、固まるタイプの驚き方に陥った。

実は私は召還という言葉から動物を、さらに言うなら先生の軽さから小動物を想像していた。

しかし考えてみれば、教えてくれるというのだから人型でもおかしくない。むしろ手先を細かく使える人型の方が、これからの学ぶのに効率が良いのは確かだった。

いや、私は別にショックなどは受けていない。幼いころに見たテレビの影響など受けていない、と自分に言い聞かせてみる。うん、本当は自分で分かっている。実は私ふかふかした子猫や兎が好きで、それ系を期待していた。召還という魔法っぽいものを聞いてから、何となく猫や鼻を想像したのだ。

その願いも、先ほど覚悟と一緒にきれいに崩れ去ったわけだ。

しかしそれを伝えるのは、せつかく来てくれた彼に非常に申し訳無い。彼がどこから来たのかは知らないけど、私の呼びかけに応えてくれたのは確かなのだ。

後ずさってしまったことはともかく、意地でも表情が変わらないように努力する必要はあった。腕に浮かんでいる鳥肌にも気付かなかったことにして、たつぷり数秒も固まってしまった時点で遅い気はするけど不自然に仰け反っていた体勢も立て直す。

静かに静かに息を吐いた。

持ち上げていた腕も下ろして、失礼にならない程度にその人の全身を確認する。

そこに居たのはどう見ても男性のようだった。

何となく全体的に赤っぽい。ただし純粋な赤では無く、黒を足したような暗い赤だ。髪も目もその色をしていて、だけど髪の方がさらに少しだけ暗い色をしている。

今までに見たことのあるような赤茶色の髪や目では無かった。とても自然に見えるのに、妙にそこにあることに意識が取られる色である。ただし私は現実に見たことがあるような色ではなかったのに、何となくこの人がこの色をしていることに納得していた。

背は大分高く感じるのに、威圧感さはほど感じさせない。きっちりとした赤系の服を着ていて、床の上にはいるはずなのに体重を感じ

させない立ち方をしている。

髪は非常に長いようで背中に流していた。肌の色は濃く、目鼻立ちのはっきりしている。そのせいできつそうに見えてもおおかしくないはずなのに、物腰が柔らかいためにそれを打ち消しているようだ。

はっきり言って、非常に目立つ端正な容姿と格好の青年だ。彼は笑顔を浮かべていつの間にかそこにいる。

思わず先ほどの決意はどこへやったのか、美形に免疫の無い私にぼんやりとした苦手意識が浮かんだ。何をされたわけでもないのに、現実の美形に胡散臭さを感じてしまう。

もちろんそんな態度は社会人として許されないので表には出ないようにはしている。気力でねじ伏せて無理にでも平気な振りをして、成功しているかは分からないけど冷静な対応を心掛ける。

「私のことはラリズと呼んでもらいたいな」

「瑞樹 相馬です。よろしく願います」

召還員から呼び出した彼はそう言った。

私は先に名乗らせてしまったことに慌てて、ただし表面上は出来るだけ穏やかに見えるように名乗り返した。

「私は何をしたら良いだろうか？」

「相談に乗ってもらえますか」

思わずそう答えていた。頷いてくれたので現在の説明を始めることにする。

彼はときどき相槌を打ち、私の話を補足しながら聞いてくれていた。ちなみに彼への説明途中で、彼自身が精霊であることを知る。

ファンタジーな存在に何と返したら良いのか分からず、思わず曖昧な返事を返す。動揺のあまり彼の顔を見ることが出来なかったので、私の視線は確実に泳いでいたと思う。

一通り話し終わって、途中僅かに熱が入って、無駄に力が籠ったりもした。

話し終わると、あまりの有り得なさに私自身に力が抜ける。先生のとときの二の舞を晒すのを避けるため、気力で持ちこたえてテーブルに懐くのを抑えた。

「これからどうしたら良いと思う?」

「とりあえず食事を作ったらどうか。もう大分昼に近いよ」

この世界にもあった時計もどきを指して彼が言った。

そして有効な助言をと思つたら、以外に時間が経っていたらしい、彼に言われて気付いた。

時計の読み方も屋敷の説明もとりあえずすべて保留にして、放置していた食器を持って台所に移動する。

そして驚く。そこにあつたのは現代文明と似て非なるものばかりだった。

彼はこの世界に電気が無いことを教えてくれて、代わりに発達しているのが魔道具なのだと言った。むしろ私の説明に時間がかかってしまい、途中でさっそく挫けそうになった。

電気が無いということはこの部屋の明かりは何だ、ランプか、と思つたら魔道具で。

コンロのようなものがあつたけど火は出ない、電気でもガスでも無い、ものを焼けるほど熱くなるのにどういう仕組みなんだろう、と思つたら魔道具で。

冷蔵庫は無かつたけどお水を冷やせるポットみたいなものがある、氷でも入っているのか、と思つたら魔道具だった。

この世界の便利な道具は、基本すべて魔道具なのだと言つ。

使い方を教えてもらい、おっかなびっくりこちらの世界で初めての調理をした。ただしこの世界の食べ物、地球とは見た目も味も違うようで分からないことだらけだった。

カルチャーショックを隠せない。

この場所のこと

私が何とか食事を完成させたころ、やっと先生が部屋から出て来てくれた。

先生がゆっくり食事を取っている間に、先に食べ終わった私はラリズに教えてもらいながらお茶の準備もしてみる。この家は食べ物に比べ、妙に豊富な種類の茶葉が用意されていることに気付いたからだ。

私が先生の方も用意をしようとする、何故かラリズに驚かれる。私は人前で、自分だけ飲み食い出来るほど非常識に見えるのだろうか。

微妙な気持ちを抱えたまま、私は改めて先生に今後の行動を相談する。屋敷に置いてある本は何でも読んでも良いと答えられてしまった。

しかしそれはすでに頓挫してしまっている。

「先生、私にはどれから読んだら良いのかわかりませんでした」

「始めのうちは指示する。慣れれば分かるようになる」

私は読書が好きだったけど、これは慣れるとかそういうレベルでは済まない気がする。思わず本当に何とかなるのか聞き返したくなかった。しかしこれから私はこの人に学ぶのだからとぐっと飲み込む。

その後はラリズと一緒に、使用しそうな部屋だけ確認することにな

った。何故なら早々に面倒になったらしい先生に、私は再び投げ出されてしまっていたからだ。

「どこに入っても良いが、研究中の私に話しかけるな。詳しいことはそいつに聞け」

そしてまた先生は部屋に閉じこもった。

私本当にここでやっていけるのだろうか。先行きが激しく不安だ。

落ち込んだ私は魔力を理解しないまま、以外に強引なラリスと一緒に部屋を見て回るようになっていた。確かに何もしなければ今度は夜になってしまう。無理やり貼り付けた笑顔が辛い。

しかし家を回りながら、だんだんこの屋敷の大きさに笑顔も苦笑いに変わる。

この家はどの部屋も一部屋一部屋がやたらに広がった。昨日から思っていたお手洗いはもちろん、物置きになっている小部屋でも他の部屋に比べて小部屋と言うだけでかなり広い。

その上、家の中のどこに言っても本が積んである。気になってはいいた食堂や玄関を始め、お手洗いや物置きの部屋にもある。広い屋敷のそこら中、あらゆる場所に山積みだ。

しかしそんな家自体は、とても大きく豪華で、屋敷と呼ぶのが相応しいような家なのだ。私は全体の調度品が立派なことには気付いていたけど、自分の観察眼に十分に満足するはめになった。

嬉しいかと言われると微妙なところだ。これだけ大きい屋敷に暮ら

す違和感は計り知れない。その内私も慣れるのだろうか。

とりあえずは出来ることから始めるべきだろう。必要そうなところだけ説明してもらおうと、とりあえず本日の目標を掃除に定めることにした。

ただし精霊のラリズも一緒である。

私は掃除だけなら自分だけでも出来るので、精霊であるラリズには帰ってもらおうと思っていた。実際お礼を言っ、後は自分でする旨を伝えている。

「ありがとうございます。また困ったときに来てもらえたら嬉しいです」

「大丈夫、手伝うよ。二人でやれば早いよ」

私これからするのはただの掃除なのだけど、彼は手伝うと言って譲らない。やたらに乗り気なのは何故だろう。とても詳しいようなので掃除が好きなのだろうか。

やたらにきびきびと進められしまい、気付いたときには二階の主な部屋の掃除が大分進んでいた。広い屋敷に比べると掃除の進み方が異常である。

私はラリズの掃除風景から目が離せないの、戦力にはなっていない。

何しろ彼はさすが召還具で呼び出した存在だということなのか、掃除をするだけなのに魔術を使う。すごく普通に行動していたために

私も最初は流しそうになった。

しかし、一度気が付くと気になってもう目が離せない。

初ファンタジー。初魔術。道具はそういうものだと思えても、いきなり目の前で説明の付かない行動を見せられてしまうと、今までの不信感も叩き潰される。往生際の悪い私はまだ諦めていなかったらしい。

しかしじつと見ていることに気付いたラリスに、精霊が使うのも魔術だけど人間の使う魔術とは微妙に違くと教えられた。どうやら参考にはならないと言いたいらしい。

申し訳ない。手を動かします。

その後はひらすら目の前のことに集中する。

非日常に疲れた私にとって、掃除はとても魅力的な行動だったらしい。かつて無いほど真剣に掃除に取り組めた。やることが分かっているって素晴らしい。

気付いたときには夜になっていた。私を照らす明かりが自然の太陽ではなく、魔道具の明かりになっていた。掃除にきりが付いた私は、蛍光灯のような位置で、しかしやたら繊細な装飾のしてある魔道具を見上げる。

一瞬、夜になると自動で明かりが灯るのか、さすが魔道具と感心しそうになった。

しかし先ほど、私は魔道具の明かりの灯し方を教えてもらったばかり

りである。つまり今光っているこれは誰かが灯してくれたということなのだ。誰かなんて先生が籠っている今、一人しかない。

「やっば」

慌てて立ち上がった。

私にはラリズがどこに居るのかは分からないけど、さすがに帰る前には教えてくれるだろう。ならば彼はどこかに居るってことだ。とりあえず探すために部屋を飛び出す。

と思ったら肝心の彼が部屋に入ってきた。とっさの勢いを殺すのに転びそうになる。

「すみません、いつの間にか暗くなっちゃったみたいで」

顔を見上げると、その勢いのまま声を掛けてしまっていた。

手に持ったままの道具が虚しい。今の今まで夢中だったことはとっくにばれているだろう。私の掃除に付き合ってくれていたのに申し訳ない。

しかし次の言葉を考えていた私は、逆にラリズの言葉に固まった。

「気にしなくて良いよ。きりが付いたみたいだし、下に食事の用意がしてあるから片付けよう」

穏やかな笑顔だった。そこには善意以外のものが含まれているようには見えない。

「ありがとうございます・・・」

お礼を言いながらも、動揺が隠せない。

何だろう彼は。つまり夢中になった私のために明かりを付け、食事を用意を用意していたということである。どんな気遣い人間だろう、いや精霊か。ひよっとしたら精霊は皆こんなに気配りが出来て当然なんだろうか。いやまさか、そんな馬鹿な。

不思議そうな顔で私を託すラリスの顔を見上げながら、思いきり狼狽していた。

確かに嬉しい。ありがたい心遣いだ。しかし私には感謝よりも何より気になることがある。

それは、ひよっとしたら、これが師匠に対する弟子の姿なのかということだ。私には無理だ、先生が私に求めるのがこれならば追い出される日は近いだろう。

「ごめんなさい」

思わず謝った。せつかく親切にしてくれたのに、そんな風にしか考えられない捻くれた人間で本当に申し訳ない。

先生のこと

私たちが食堂に下りていくと、先生はすでにテーブルに着いていた。しかしそこに食事の用意は無く、先生が腕を組んだ状態で座っているだけである。待たせてしまったのだろうか。

先生は何か考え事でもしているのか、私たちが部屋に入ってもこちらを見たりはしなかった。朝からの不機嫌そうな顔で、組んだ腕だけをじつと見ている。私が席に着くときになってやっと一瞬こちらを向いてくれたけど、それも一瞬のことで直ぐにまた戻ってしまった。

先生の様子が気になって、気持ちがそちらに向いていた私は、ラリズに案内されるままに席に着いた。あまりに自然に行動で、何の違和感も感じられなかった。

しばらく先生の様子を窺っていた私が気付いたときには、彼がすでに盆の上の食器をテーブルの上に用意していた。私の中のもやもやした気持ちはさらに膨れ上がり、拳動不審気味に視線を彷徨わせている間にそれも終わってしまふ。

慌ててお礼の言葉だけでもと伝えると、一瞬驚いたあとに笑顔を返してくれる。本当に私はどれだけ彼に非常識だと思われているのだろうか。

私はてっきり一緒に食事を取るのかと思ったのだけど、ラリズは準備だけ済ませるとそのまま帰ると言う。彼はどうやら食べるつもりが無い食事を作ってくれたらしい。

ラリスは終始笑顔で、私に対しては帰るときに上機嫌に手まで振ってくれた。手を振り返すことに弱冠の抵抗感を覚えながら、何故これほど友好的な対応を取られるのか気になってしょうがない。

しかしそれ以上に気になったのは、ラリスが先生に対して何の反応も示さないことだ。視線すらよこさない。先生がラリスに対して一度も視線を上げなかったことは、不機嫌だったんだろうかで済んでしまったのだけど、知り合いのようにも見えたので、妙に納得出来ないものを感じる。

それでもラリスに感謝しながら、先生と一緒に食事を取った。

聞かなければいけないことがあるので、食器を片付けるのは後回しにしてお茶の準備だけする。魔道具と屋敷のことを学んだので、今後は私だけでも片付けが出来る。

「先生、部屋には戻らないで下さいね」

先生に伝えるだけ伝えてから、広さ的にも雰囲気的にも厨房と読んだほうが正しそうな台所に向かった。

今朝のことが尾を引いているのか、先生には言っただけで居なくなりそうな雰囲気を感じてしまう。いきなり放置は本当に止めてほしい。たとえば言っておいても無視されそうな気もしたけど、言わないよりは良いだろう。

慌ててお茶の用意をして戻ると先生はそこに居てくれた。しかし一度食堂を離れたのか、テーブルの上には先ほどまでは無かったものが置いてある。

「これをやる。使え」

「待つてください先生、テーブルの上を滑らせないで。お茶が零れる」

いきなり先生にずいとよこされて、慌てて先生と私の前から避難させる。このお茶は保険なので零されると困ってしまう。

私は朝とは違い警戒しながら、手には取らずに目の前のそれらを確認する。きつとまた手に取るはめになるのでこの警戒は無駄になるだろうけど、それくらい朝渡された腕輪の印象は強烈だった。

先生が寄越したのは腕輪、宝石、それに何冊かの本だった。

腕輪はすでに私の左腕に嵌っているものと同じ材質のようではあつたけれど、それとは違い宝石などは付いていない。まるで代わりのようにいくつかの色の違う宝石が添えてある。

本のほうはどれも同じように厚く、ハードカバーと呼んで差し支えない立派な装丁をしている。しかしすべて非常に古いもののように、この屋敷にあった他の本とは違い、角が掛けてくすんだ飴色をしていた。古い本ならではの味のようなものを感じることが出来る。

日中にも選んでくれると言っていたので、学ぶための本は分かる。しかしこの腕輪は何のためなのだろうか。

「本は上から順番に読め」

「分かりました」

読む順番まで指定される。崩さないようにこれはこのまま運んだほうがいいだろう。

「腕輪は常に身に付けている」

「何に使うんですか？」

「今はただの腕輪だ。魔力を吸わせたら魔石と術式を決めて魔道具を作れ」

召還具の腕輪はすでに完成しているものだったが、こちらの腕輪は自分で考えて魔道具を作れということだろうか。つまりこの腕輪と宝石は勉強の教材と言ふことだ。

完成したら召還具の腕輪を左にはめているので、この腕輪は右手にはめることにしようと思う。この腕輪もきつとあなるので覚悟を決めてから試したほうが良いだろう。

お礼を言っつてそれらを受け取る。先生がここに居てくれたのはどうやらこの教材を渡すためだったらしく、妙に満足気に見える。

しかし早くも立ち上がるうとしてるので、私は慌ててお茶の用意を始めながら話を切り出した。まだ私には聞きたいことも聞かなければならないこともあるので、部屋に戻られては困る。

このお茶の入れ物も魔道具の一つなのでまだ十分熱いと思う。とりあえずこれでお茶を飲み終わるまでの時間を稼ごう。

「魔力や魔術つて見るだけで有る無しが分かるんですか」

「通常は分からないが訓練を積むと判るようになる人間もいる」

先生は訓練を積んだ人間ということですね。私も訓練を積めば魔力が分かるんだろうか。さんざん魔力魔力と言われながら、私自身がまったく分からないとか、非常にやりづらいので早く何とかしたい。

先生はお茶の入ったカップの表面をじっと見てる。どうやら部屋に戻るのは止めたらしい。

大丈夫です、先生。毒じゃないです。美味しいですよ。

心の中だけで反応する。

厨房のお茶の種類はとても充実していた。来客時のために用意しているだけとは思えないほどに。

だから私はラリズに、お茶の簡単な入れ方と種類もちゃんと確認しておいた。

先生は確かにこんな飲み物、食べ物に興味は無さげなではあるし、自分で用意するとはとても思えない。実際ラリズもそう思っていたのか、お昼のときも私が用意しようとするまでは動かなかった。

しかしあれだけ有るんだから嫌いでは無いだろうと、私は勝手に思っただけで実行してみた。

そしてどうやら私は賭けに買ったらしい。

自分のこと

私はそれからしばらく先生に質問をしていた。

いくつかの質問をして、いくつかの回答をもらう。一度に詰め込んでも溢してしまうことになるから、ラリズには聞けなかったことを中心に、少しだけ教えてもらおうと思う。

この家のこと、家族のこと、世界のこと、他の場所から呼んでしまったラリズには聞けなかったことを確認する。

私がした質問に先生は迷ったり言い淀んだりしないで、簡潔に回答だけをくれる。

ただし基本的に聞いたことにしか答えてくれないようで、先生の答えの中に分らないことがあるとそれをまた私が確認することになる。気付くと単語のみで会話しているような状態になっていた。

だけど気付いた時には持ち上げたポットは軽くて、確認してみると空になってしまっていた。今日はもう切り上げたほうが良いということだろう。

最後にもう一つだけ、これだけは今日中に確認しなければと考えていたことを聞くことにした。

「先生、これからの生活、特に注意することはなんですか？」

それは本来ならば、真っ先に聞かなければいけないことだった。それなのに私は、何となく聞き辛くてずるずると先延ばしにしてしま

っていた。

私は先生に助けてもらったのだ。いきなり家に押しかけて、食事までご馳走になって、さらにはこのままこの家に居て良いとまで言ってもらった。はっきり言って迷惑を掛けているなんて言葉では済まない存在だ。

それでも私にはここを出て行っても、当てなんか無いし行くところも無い。路頭に迷うのが関の山だ。

だから私はここに居る。ずうずうしくも居座ることにする。

だからせめて私はこれから先生と共に暮らしていくに当たって、弁えておくことを知らなければならぬと思う。もちろん自分でも注意するつもりだけど、常識が違うのだから聞いてしまうのが一番確実なのだ。

私は学ぶためにここに居る、居させてもらっている。そんな状況で、わざわざ場を提供してくれた先生を不快にするようなことは避けなければならぬ。

少しずつなんて悠長なことも言っていてられないし、問題を起すわけにもいかない。今日は何とかなってしまっただが、これからの毎日が常に上手くいくわけないのだ。

だからこれだけは聞いて、確認を取っておかなければならなかった。なのに、確かにそう思っていたのにもかかわらず、私は先生に苦い顔をされることになった。

「気を付ける」

注意を受けて思わず固まる。私は早速今日の行動で問題を起こして
いたらしい。

ひよっとしたら私の決意は崩されるためにあるのかもしれない。

「自分の事情を話すな」

それは今日、昼間に行なった初めての精霊召還についてだった。私
がラリスに話したことについてだ。

確かに私はラリスに自分のことを説明してしまっていた。それは現
状を正確に理解してもらわなくては、適切な助言が得られないと考
えたからだ。

しかしそれは先生から見ると、注意が必要なほど問題ある行動だっ
たらしい。

「いけないことだったんですか？」

「わざわざ弱みを見せるな」

「弱み？」

「自分が有能であるように見せる必要は無いが、初見の相手に内情
をさらすのは馬鹿のすることだ」

辛辣な言葉を頂いた。

気まずくは感じたが、先生から目は離さなないようにする。わざわざ注意してくれるほど、それはこれから生活していくにあたって大事なことなのだから。

私は今日の行動を自分自身に問い掛けてみる。

そしてやっと気付いた。まだ私の足はふわふわとしていて地に着いていないことに。

それは確かにそうだ。初めて会った人間に自分の相談なんてしないだろう。それは元の世界でもこの世界でも変わらないはずだ。意思のある人間が、ちゃんと生活しているんだから。

むしろ相手のことをよく知らないんだから、された方だって困るだろう。ラリズもきつと困っただろう。占い師の人や相談窓口の人のような前もっての前提も無いのに、いきなり呼びだれていきなり相談だ。

相談なんてのは自分を良く知っている、自分が信頼している相手にすべきものだ。自分のことを理解してくれている相手だからこそ一緒に解決策を探せる。

私はこの世界に一人なのだから気を付けなければならない。

「分かりました」

それは確かに納得出来る言葉に思えたから私は深く頷いた。

しかし先生はゆるく首を振る。

どうしてだろうか。私の出した答えは間違っていたのだろうか。

「いや、君は分かっている。私が言っているのは容易に他人を信用するなど言うことだ」

「信用、ですか？」

否定されてしまった。

「今まで居たのがどれほど安全な世界かは知らないが、ここはそんな甘い世界では無い」

「安全では無い？」

今度こそ先生は頷いた。私をきつく睨んだ。

「弱みを見せるな。相手のことを考えるな。自分のことだけ守れ」

世界のこと

先生との話を終えた私は、二階に行くことにした。

私は先生の「二階は物置」発言に従って、最初に潜り込んだベッドの部屋を勝手に自分の寝室に決めていた。

始めてこの部屋に入った時にはベッドにしか興味が無かったけど、掃除をして埃を掃うことによってこの部屋のこと今ははっきり分かっている。

そこは思わず感歎の溜息が出てしまうほど美しい、私には勿体無いほどの立派な部屋だ。落ち込んでいた私の気分も少しだけ浮上させることが出来るほど素晴らしい部屋。

正直、隅に寄せてある、私がここに来たときに持っていた荷物だけがものすごい違和感を発している。

ちなみに豪華なのはこの部屋だけではない。この屋敷にある部屋は、基本的にどの部屋でもかなり豪華な作りになっていた。

棚や机に施されている彫刻は繊細なものだったし、窓やベッドに掛けられたシーツやカーテンは華やかな刺繍で彩られていた。床のカーペットなんて裸足で歩きたくなくなるくらい毛足が長く艶やかだ。私は今まで、これほど立派なものはホテルですら見たことが無かった。

そしていったいどんな術が掛けられているのか、この家の装飾品はすべてが色鮮やかだ。

先生は使用しないでここを放置していたはずなのに、家具も布もまったく色褪せてるようには見えない。使い込まれた重厚感を感じることは出来なかったけど、その代わりに新品同様の光り輝くような美しさを誇っている。

私が来たときには、そんな鮮やかな芸術品の上にただ埃だけが積もっていた。作られたばかりに見える美術品の上の埃は違和感が凄い。そういえば先生は、本当に二階の構造を無視していたようである。

先生に聞いた時は一階のものしか教えてもらえなかったけど、二階にだってお手洗いや浴室はちゃんとあった。わざわざ下まで行っていたことに思わず苦笑いが浮かんでしまい、黙り込んだ私をラリズが不思議そうに見ていた。

思い出すと本当に微妙な気持ちになる。気にしている余裕は無かったけど、確かに屋敷の大きさ的にもあそこだけなんておかしいだろう。この屋敷は備え付けの寝室の数的にも、複数の人間が宿泊出来るようになってきているのだ。

ただしあくまでも宿泊出来るというだけで、先生以外の誰かがここに住んでいるわけでは無いようだ。こんな広い屋敷に長く一人暮らしだったらしい。

羨ましいような、羨ましくないような、寂しくはないのだろうか。寂しくないと思えられたら、逆に寂しい気もする。そして先生は本当にそう思えそうな気がする。

私はちょっと堪らなくなってベットに寝転んだ。足もベットに上げようとして慌てて靴を脱ぐ。

寝るわけでは無いけれど、少しだけこうしていたかった。

今日の私はお風呂にも入るつもりだ。妙に恥ずかしく感じることは気付かない振りをして、ラリズに浴室の使い方を教えてもらった。今日は掃除もしたことだし、昨日お風呂に入れなかった私はきつと汚れている。いい年した大人がそんな姿で人前に立つなんて恥ずかしい。

色々な考えが頭を過ぎる。いつもは意識して考えを止めるところを、それをさらに進めてみる。

しかしどんなに考えても抜けないのは、先ほど先生に言われた言葉。自分のことだけを考えると言った先生の顔だ。

私は甘かったのだろうか。

幾つもある月を見て、先生に魔力のことを聞いた。屋敷中にあるおかしな道具を触って、ラリズの不思議な術も見た。

だから自分では納得したつもりでいたし、半信半疑だった気持ちも次第に落ちてきてきたと思っていた。ここが紛れも無い現実で、これが間違いの無い真実であると分かっていたつもりだった。

それでもやはり、つもりでしかなかったのだろうか。

思い切り顔をしかめる。毛布の中に潜り込んで、体を小さくするよ
うに丸める。

いっそ本当に小さくなれたら良かったのと、ぼんやりと思う。

そうすればもっと簡単にこの世界に順応出来た。こんな三十間近のおばさんじゃなくて、そう、それこそ中学生とか高校生とか。小学生はさすがにかわいそうだけど。

現実を知ってしまった大人なんかじゃなく、まだ子供といえる年齢だったらきつとこんな世界でも楽しめた。

何しろ魔力と魔術があつて、教えてくれる人と親切そうな人がいて、自分には大きな力がある。すごいファンタジー、漫画の世界だ。そういうものが好きな人が喜びそうな展開が盛りだくさんである。

本当なら読書が趣味の私だつて好きなはずなのだ。

だけど、それでも、私はこれを現実だと認めることが怖い。

もっと簡単に先生の言葉を信じられれば良かった。もっと勉強をするのを楽しみに出来たら良かった。そうだったらきつと明日への希望を胸に眠ることも出来たし、世界を知ること恐怖なんて感じなかった。

子供にだつて辛いことがある、そんな言葉は却下だ。これはただの愚痴なのだと、自分で分かつてる。

今の自分はどうかんだろうか。

納得出来なくて蹲っているだけ、自分で決めたことだつて最後まで貫き通せない。情けない。

涙が出そうに強く唇を噛み締める。

とりあえず笑顔

翌朝目覚めた私は、やっと残っている荷物を片付けることにした。

といっても、ほとんどは昨日の掃除中にラリスに確認しながら分別してしまったので残っているものはごく僅かだ。

ゴミで残っているのは、処分の仕方の分からない、もしかしたら何かに使えるかもしれないペットボトルだけだ。これもそのまま残しても困るので、すでに水で綺麗に濯いである。

私がかちらに来る前にした買い物では、スーツ姿で臭いの付きそうな肉や魚を買うことにも抵抗があったためバナナが唯一の生ものだった。そのバナナも先生がすべて片付けてしまったので今はもう残っていない。現在残っているのは調味料や菓子だけだった。

せつかなので、残っているそれらは厨房へ置いておこうと思う。どうせだったら調味料はこれからの料理に使えたほうが良いし、菓子は誰かと一緒に食べられたほうが嬉しい。

ざっと身支度をして着替えをする。

ちなみに今はもうスーツを着ていない。先生の上着に良く似たデザインの淡い水色の上着を着ている。

これは昨日、この屋敷をラリスと一緒に確認したときに見つけたものだ。真新しくとても古着には見えないのに、埃が積もった状態でいくつかも物置に置いてあった。

長く放置されたい事は間違いないし、着替えに困っていたこともあって、おそるおそる先生に確認したところこれも呆気無く使用許可が下りた。

どのくらい昔なのかは聞かなかつたけど、どうやらこれはもともとは先生の着替えとして用意されたものらしい。魔術師として勤めた時に用意された、色が気に入らなくて着なかつた、という非常にはつきりした先生らしい答えをもらった。

裾はやっぱりものすごく長いけれど、私が着るとまるでロングスカートのようにも見えるのでこれもありだと思う。少し違和感を感じるけど、それほど裾が足に絡まないことが不思議だ。

昨日の風呂上りにはそれに着替えることにした。色は同じでも品質には少しずつ差があるようだったので、浴室に行く前に出来るだけ柔らかいものを選んでおく。

そして結局、昨日は入浴後何もせずに寝てしまった。

お湯に浸かったら気が弛んだのか、入浴中にも何度か意識を飛ばしそうになっていた。一気に疲れが押し寄せてきたのか、今思うとかなりぎりぎりで危ない。思えば昨日も長い一日だったので、気力で何とかするには限界だったのだろう。

最終的には、長く湯に浸かりすぎたのかぼせてしまい、ふらふらしながらベットまで辿り着いたのだ。

本日は空色の上着から空色の上着へと着替えをする。

見た目はほぼ変わらないけど、これしか無いのだから仕方が無いの

だ。着替えがあるだけ良かったではないか。そつと自分を慰めた。

私は、決して昨日のことを忘れたわけでは無い。

だけどそれでも今日は続いていくし、生きていくためにはこれからを考えなければいけない。今は無理でも明日にはどうにかなるかもしれないと思うことにする。とりあえずは今出来ることをする。

厨房に調味料などを並べながら私は意識して笑顔を作る。困ったときでもとりあえず笑顔。空元気でも元気のうち。日本人の美德、今こそその力を発揮して欲しい。

しかしせつかく気合を入れても、厨房にある食材を見るとかなり残念な気持ちになった。

目の前にある材料はひどく偏っている。

この材料で作ることの料理はひどく限られてしまうと思う。出来ることといたら調味料で味を変えるぐらいだろうか。今までこの屋敷の家事をしていた誰かは、食事には関心が無かったのだろうか。

いや、関心が無かったのは先生だったのかもしれない。先生が関心が無かったから、家事を担当をしていた誰かも家主の意向に従ったのだろう。

それでも私は、炒めてみたり煮てみたり具の増量を試みたり、今ここにある材料で何とかならないかと苦心してみる。

しかし思ったほどの変化は無い。味見を試みても微妙な顔になってしまう。

保存食っぽいものだけでは無く、もつと野菜が欲しい。誰かが買って来てくれたり、届けてくれたりしないものだろうか。先生に頼めば何とかしてくれそうな気もするけどそれも申し訳無い。

それでもいつの間にか時間は結構経っていたようで、気が付いたら先生が起きていた。いったん納得したことにして、先生と一緒に食事を取ることにする。

また私には聞きたい質問があった。昨日の使い方であっているのかどうか、召還具の使い方が不安だったので確認したかったのだ。

「召還具を使用する時って、何て声を掛けるものなんですか？」

「決まった言葉は無い。好きにしる」

どうやら掛ける言葉は何でも良いらしい。ちちんぷいぷいとかテクマクマヤコンとかそれっぽく言うのも有りなのだろうか。

「相手に分かりさえすればどんな言葉でも良いんですか？」

「言葉が召還具で呼ぶものへと届くとは限らない」

相手に伝わらない声掛けって意味があるんだろうか。

「皆声に出すんですよね？」

「術を明確にするため声をあげる人間が多い」

つまり絶対に声に出さなければならぬという決まりは無いんです

ね。

「それってただの掛け声なんじゃ？」

「それ以外の何がある」

それは確かに決まった形は無いだろう。

どうやら必要な魔力とやらを差し出すために気合を入れているだけらしい。呪文はただの景気付けで、自分が集中するための道具らしい。

少し乱暴だがそれはつまり、武道などで声をあげるのと一緒と言うことだろうか。私はこれからそれをしますよ、という宣言ではないだろうか。

「魔術と召還って違うんですか？」

「召還術も魔術だからな。魔術も使用する術の明確化のため声をあげる人間が多い」

召還術も魔術。では私は本当にあの方法で魔力を捻出できていたよ
うだ。

そういえば言葉が通じるのも、文字が読めるのも私の魔術だと言っていた。魔術に決まった言葉が無いのは私にとって幸運だったの
だろう。

何か言葉が必要だったらきつと使えなかっただろうから。

単調な日々

ひたすらに本を読む。分からないことは書き出して、先生に確認することは纏めておく。

はつきり言って、内容を理解しているか聞かれたら答え辛い状況にはなっている。それでも読む。とりあえず先生から指示のあった順番に読んでみる。

先生の貸してくれた本の中には、何故こんなものかと思うような挿絵が多く載っている絵本もあった。先生が分からない。疑問は増えるばかりだ。

本の内容はばらばらで、文字の量もさまざまだった。なのに続けて読むことよって、前に記載されていた内容が理解出来ることもあった。気が付いたら前の本に戻って読み直すこともあって、量的にはあまりはかどってはいないと思う。

それでもとりあえず読み続ける。目も頭も酷使しすぎて、頭痛がしそうな現在である。こんなに本を呼んだことは学生のころでもなかった。何となく受験勉強を思い出した。

食事は先生と一緒にだったり、一緒ではなかったりする。

一緒になった時は、食事をしてお茶をして質問をする。鬱陶しいかもしれないけど先生も根気良く付き合ってくれる。質問さえすれば先生は必ず答えてくれるようだ。

ただし先生は、自分の生活スタイルを変えるつもりは無いようで基

本自由には生きている。私は出来るだけ自分で決めた自分の部屋で過ごすようにしているので、会えない時は本当に会えない。

聞きたいことが溜まると、気分転換を兼ねて料理に時間を掛けてみる。

ただし道具の使い方には大分慣れたけど、食事の内容にあまり変化は無い。非常食に出来そうなパンや乾物類、調味料、根菜だと思われる野菜など。現在、保存の利きそうな食べ物にはかなりの余裕があるのだけど、葉物野菜や果物にはまったくお目にかかれていない。

当たり前だ。それらは元々この厨房には無かったのだから。

ここにある材料で料理をしているのだから、調達してこない限りこの食生活が続く。しかし手に入れるためには資金が必要になるし、私の魔力は不安定のようなだから我慢して何とか工夫しようとしている。

それ以外は私は基本自分の部屋で本を読んでいる。

私が自室に選んだ部屋は、窓際中央には大きなベットが置かれていて、そして窓を挟んでさらにその両側の壁に作り付けの棚が用意されている。非常に気持ちの良い、暖かな場所だったのだ。

この屋敷の二階にはここ以外にも幾つか寝室があった。どうやら基本の配置はこれで統一されているようだったけどこの部屋が一番過ごしやすい。

すべての寝室は、家具の大きさなどが変わらない分それ以外のもので変化をつけているようだった。使用している壁紙やシーツ、カー

ペットを始め、ベットや棚の彫刻まで違うようだ。そのために驚くほど部屋自体から受けるイメージも違った。

私の選んだこの部屋はおそらく春のイメージで整えられているのだと思う。

ベットの天蓋やカバーの刺繍、備え付けの棚や机に施してある彫刻などからは暖かな季節を連想させる。全体的にはクリーム色で、ところどころアクセントに桃色や水色、黄緑などに白を足したようなパステルカラーが入っている。

華やかに見えて落ち着いた、寛いだ雰囲気がある。塞ぎがちな気分も受け止めてくれるような穏やかさを感じる気がする。今の私に足りないものを助けてくれているような気もした。

しかし私がこの部屋を選んだ一番の理由は部屋の中央にあるベットだ。

最初に潜り込んだときから、埃にまみれていたとはいえ十分な睡眠を提供してくれたこのベットを私は気に入ってしまったのだ。どの部屋のものも素晴らしかったのだけど、一度横になったため何となく愛着がわいてしまったと思う。

ちなみにこのベット、地球にあるホテルのベットなどを想像してはいけない。何といてもホテルにだって無いようなとんでもない大きさがある。いったい何人で寝る予定なんですかと聞きたくなるような広さだ。

ちなみに他の部屋にあったベットも総じて皆大きかった。この屋敷のベットが特別大きいのか、それともこの世界のベット自体が大き

いものなのか悩むところではある。

そしてこの屋敷のベットには、デザインこそ違うものの二階にあるすべてのベットに天蓋が付いていた。

ただし部屋ごとに違うイメージで用意されているようで、受ける印象はやはりまったく違う。天蓋と言うとふわふわとしたものを私は想像しがちだったけど、男性を意識していると思われるすっきりとした物もあった。

私の選んだこの部屋のベットは幾重にも薄い布で覆われていて非常に細かな刺繍が施されている。はっきり言って地球では博物館や美術館にでもありそうな緻密な装飾である。明らかに手で行われた、どれほどの時間がかかったのか想像も出来ないようなものが随所になされている。

地球でこれを目にしたら、ちょっと横になるのを躊躇うような代物ではあった。しかしこの部屋のイメージにはびったり嵌っている。実は私も改めてみた時は大分呆然とした。

しかし掃除を手伝ってくれたラリズはこの部屋を自室にすることに決めたのだの思ったらしく、掃除を私に任せてくれた。

というかはっきり言うと、私はこの部屋の掃除しかしていない。他の部屋はすべて彼がしてくれていた。

しかもそれは、女性の部屋を男性である自分が手を付けるわけには行かないという気遣いだったようなのである。気付いたときにはすべてが済んだ後で、今さら変えるというのは非常に申し訳無いことになっていた。

先ほどの理由は実はすべて跡付けなのである。私が気に入ってこの部屋にしたのだと思いたいのだ。

外への興味

先生は本当に二階を物置として使用していたようだ。

私が自室として使用している部屋以外にも、二階には幾つもの部屋があり作り付けのベッドや棚が用意されていた。ただしそんな部屋のほとんどには乱雑に物が押し込まれていた。それは私がベッドを探したときに、そんな部屋に遭遇しなかったのは幸運だと思っくらいには多かった。

一応、種類ごとに分けてはあるようだけど、棚に入りきらず床にまでビンが散乱している部屋や、どう使うのか皆目検討の付かない道具に占領されている部屋もある。

しかし一番の謎は、床の上に石が積み上げられている部屋だ。

石の形も大きさもばらばらで、小指の先ほどの大きさから、私では持ち上げるのに苦労しそうな大きさの物までが纏めて置いてあるようだった。ほのかに色付いている物もあるようだけど、ほとんどはただの石もしくは岩に見える。

さらに削り出してきたばかりと思われるごつごつした物から、明らかに手を加えたと分かる物までが混ぜて置いてある。宝石のようにカットされた物から、床を滑らせれば転がりそうなほど研磨された球体状の物までがあった。

それらがすべて適当に積み上げられている。あえて言うなら私には手の加えてあるものがそれ以外のごつごつしたものによって傷付かないのかが気になるところだ。この石も何かに利用できる物なのだ

るうけれど、どうしたら良いのか分からないのでそのまま放置してある。

ラリズは一応そんな部屋の掃除もしてくれたようで、私が気が付いたときにはもう埃は積もっていなかった。

ここにある良く分からない道具は、おそらく魔道具なのだと思う。私は先生から渡された腕輪の参考になればと、気分転換に併せてこの道具を見て回ることもあった。

なぜなら獣がいるという以前の先生の言葉が気になって、たとえ気分転換にでも外に出るのが怖いのだ。外の様子を伺うのは、せいぜい二階の窓を開けて覗くぐらいにしている。

しかし外は見れば見るほど外は深い森のようで、先生の言葉を想像させるような状況でしかない。今のところ獣の姿を見たことは無いが、もし万が一を考えるととても行動には移せない。何処から覗いてもここ以外には他に家があるようには見えないのだ。

ぽつんと開けた場所にこの屋敷だけが立っている。

ただ眼下に見える花畑にはとても興味があるので、そこぐらいまでなら行ってみても良いかもしれない。本当に綺麗な花畑なのだ。先生の言葉さえ無ければあそこで勉強したいぐらいだ。ただしやっぱり先生には一度確認してからはしようとは思っているけど。

ちなみにいきなり動き出されても怖いので、道具にも手を出したりはしていない。純粹に眺めているだけだ。

私は本を読み出してまだ数日しか経っていないので、魔力への理解

が進んで制御できるようになったとはとても言えないと思う。

さらに腕輪にだって勝手に魔力が取り込まれていて、呼ぶだけで精霊が出てきてくれたりもするのだから、何が引き金になって動き出すのか分からない。用心するに越したことは無いだろう。

「召還具と魔道具ってどう違うんですか？」

ある日の食事後に聞いてみることにした。

「同じものだ」

「呼び方が違うじゃないですか？」

「召還することの出来る魔道具を召還具と呼ぶだけだ」

「召還具も魔道具なんですか？」

「魔道具だ。魔石と魔術により稼動している道具はすべて魔道具と呼ぶ」

不思議な働きをするものを全般的に魔道具と呼んでいるようだ。構造が分からなければすべて魔道具と呼んで良いのだろうか。分かりやすい。

「魔道具に使う材料って決まっているんですか？」

「特に制限は無い。木材よりも金属に魔力の適正はあるが絶対でも無い」

材質のことも聞いてみた。触っただけでいきなり不思議な反応をされたら私は逃げ出す。心の準備くらいさせて欲しい。

「腕輪の金属って珍しいものなんですか？」

「珍しくは無い。金さえ出せば手に入る」

金さえ出せばって、やっぱり高価な物の気がする。普通に流通しているけど値が張るって意味じゃないだろうか。出来るだけ扱いには気を付けよう。

「この屋敷にある道具は先生が作ったんですか？」

「そうだ。他人のものを使うぐらいならば自分で作る」

そこまで言わなくて良いと思うんですけど、どうなのでしょう。そういえば、

「先生は何の研究してるんですか？」

「私の研究は術式の効率化だ」

「使い方は自分で分かるって言ってませんでしたか？」

「魔力のある存在は本能で力の使い方を知っているが、術式への理解を深めるとさらに効率上がる」

終わらない研究っていうやつかもしれない。効率化の先の効率化。だがそうになると、私が帰れるのはいつになるのか判らない。

おかしな家

ここに来てから先生以外の人に一度も会っていない。

窓から見える範囲に他の家が無さそうなことは、私も以前から確認していた。

しかしそれ以外に屋敷へと訪ねてくる人はもちろん、屋敷の前を通りかかる人すらもまったくいない。ひよつとしたら、この屋敷を訪ねてこられるほど近くに人は住んでいないのだろうか。それでもここに住んでいる人がいることを知っていれば、誰かが訪ね来てもおかしくないと思う。

私自身にも問題があるようなので、ふいに他の人に会うと何が起きるか分からない状態ではある。見ず知らずの人をそんな状況に巻き込むことが無いことは良いことだとは思う。

しかしずっと先生と二人だけだと、妙に他の人にも会いたくなくなるきもあるのだ。

ただどこに来てから、私は本当に先生以外の人を見かけない。

それどころか鳥の囀りと遠く微かに飛んでいる姿を見かけることだけがすべてだった。私がここで先生以外に生きている感じる存在はそれだけであった。

凶暴な獣に遭遇しないことは良いことだけど、獣以外の動物にもまったく遭遇していない。

ちなみにラリズはここ以外の場所から召還して、来てもらった精霊なのでノーカウントにしている。現在何となく呼ばずに生活できてしまっているため、来てもらったのも最初の一度きりである。

先生は家畜すらも飼育しないで、ここで純粹に保存食のみで生活していた。そのため躊躇しながら確認を取って、おそろおそろ花畑までは出てみたのだけどそこもひどく静かな空間だった。

先生はここで誰かと一緒に住んでいるわけではないようなので、たった一人でここにいる。

そして屋敷と花畑の周りにはただ深い森だけが広がっている。

ただ私には見える範囲には川や池などの水場も無いのに、この屋敷にしつかり水が届いていることが不思議だった。飲み水や料理に使用する水が足りなくなるようなことは決して無く、浴室やお手洗いで使用する水ですら節水する必要は無いらしい。

盛んに首をひねる私に対して、天気に影響されることがないように地中を通っていると先生が教えてくれた。

いったいどんな構造になっているのか、こちらでも厨房などで蛇口のようなものを捻るとちゃんと水が出てくる。どこからか運んできて、溜めておいたものを汲み出して使用するというわけでもないのだ。

下水もしっかり整備されているようで、嫌な臭いがこもることも無い。

特にお手洗いは、最初に使い方を教えてはもらったのだけど、それ

すら聞かなくても困ることが無意ほどの親切な設計だった。ファンタジーっぽいこの世界のトイレ事情にひそかにびくびくしていた私を大いに安心させている。

それは普通に水洗トイレみたいな形をしていて、水洗トイレのようにちゃんと蓋が付いていた。蓋を取ると奥の方で水が流れているのが見えるという、本当に地球そのままな水洗トイレだった。ただ水はずっと流れ続けているものらしく、止まることが無いということだけが違う。

きっと地球のトイレとは設計からしてまったく違うのだろうけど、ひとまず安心出来た。非常に良かった。ひよっとしたらずっと水が流れている分、こちらの方が綺麗ですらあるかもしれない。

ちなみに脇にはかごが乗った棚が置いてあって、中には凄く柔らかい葉っぱのようなものが入っていた。使用後にはこれを使うようだ。葉っぱみたいだと思ったが本当に葉っぱらしく使用後はそのまま水に流して良いらしい。

しつかりしすぎている上下水道に違和感を拭えない。

ものすごく不便に感じる一方で、こんな現状であることを忘れることが出来そうなほど快適な暮らしを送れるのである。

しかしふいに私は疑問に思うこともある。

「先生、今までこの家の家事は誰がしていたんですか？」

今は私が料理をしているけど今まではどうしていたんだろうか。先生はとても料理等をする人には見えないのだ。

「精霊だ。召還具で呼んでいた」

「いつも同じ精霊の方ですか？」

私が掃除をラリスに助けてもらったように先生も家事を精霊にお願いしていたんだろうか。

それはひよっとしなくてもラリスじゃないのだろうか。彼はとてもこの屋敷の中のことには詳しくかつたし、信じられないくらい手際が良かったのだ。

「気分だ。同じときもある。違うときもある」

きつとラリスだ。しかも何度も呼ばれているような気がする。

そろそろ限界

私は約一週間頑張った。

ひたすらに本を読み、食事を作り、先生に質問し、たまに気分転換を行なう。あちらのことを思い出して考え込みそうになりながら、そんな生活を私は何とか一週間続けていた。

何もかも違う生活環境でありながら、私はかなり頑張っているほうだと思う。

誰も認めてくれないだろうから、とりあえず自分で認めて持ち上げてみる。虚しい作業だけど、自分自身を励ますために行う。社会人になってからは日々の成果が目に見えないことにも慣れたと思っていたのに、今すごく辛いのだ。

しかしそんな生活の中でも、私は意識して元の生活のことを思い出さないようにしている。意識している時点で失敗している気がするし、些細なことで思い出してしまうと頭から離れなくなることもあるけれど、それでも出来るだけ考えないようにしている。

家族のこと、友達のこと、家のこと。私は何も残せずいきなりこちらに来てしまったので、本来ならば心配することが色々あった。

ただ考え始めると、私の周りの人達がどうしているのか、急にいなくなることがどのような扱いになっているのか、なんて切実なことから始まって、育てていた観葉植物や家にある冷蔵庫の中身なんてことまで、何だっけって気になってしまう。

一人きりしかいない状況で心配し始めると、すべての考えが悪いほうへ悪いほうへと進んでしまう。皆がどれほど心配しているか、どんな状況になっているのか、なんて考え始めると切りが無いし限界も無い。

しかしどんなに心配したところで、今のところ私に直接出来ることは何も無い。元の場所に帰るところか連絡の一つも入れられないのだから、ただひたすらに心配して、ああだろうかこうだろうかと想像力を膨らませることしか出来ないのだ。

だけど当然、そんなことをしていてもただ時間が過ぎていくだけで何も解決しない。私の上に心労だけが降り積もっていく。

そんな現在の状況で私に出来ることといったら勉強を進めることしかない。以前の生活に思いを馳せて泣くくらいならば、いつの日か帰れることを夢見て学ぶほうがまだ建設的だと思う。

そう思っていた。確かに思っていた。

私は確かにそう思っていたはずなんだけど、しかしそろそろ限界のようである。

何がって食事のことだ。こちらにお世話になっておよそ一週間しか経っていないのだけど、もう私は音を上げています。

学ぶことだけならまだしばらく大丈夫だったのだろうけど、食事のことはそうもいかない。我慢で何とかなるものでもない。

こちらの食事も一日三食が基本のようなので、私もここにある食材で何とかしようとして一日三回努力してみた。

しかし自分に妥協点を提示して、先生と一緒に食事を取るのもう私には辛い。辛すぎて気力も湧かない。食生活が偏ることによって集中力も低下して、勉強の効率もがくと落ちてしまった気もするのだ。気力だけで何とか誤魔化していた身としては致命的であった。そろそろ先生に言い出すことにしようと思う。先生はこの食生活に不満は無いのだろうか。

基本的に一階は先生の生活スペースと考えていたので、私は出来るだけ邪魔をしないように暮らしていた。具体的には先生の生活のペースを崩さないように、私は主に二階で勉強しているのだ。

しかし今日ばかりは勉強道具である本を食堂に持ち込み、先生の研究に区切りが付くのを待つことにした。一応今の私の精一杯の努力である食事も用意はしてみる。

研究室から出てきた先生は、私が食堂にいることに一瞬驚いていたようだった。しかしそのまま近付いてくる。

すみません先生。今日の私は質問があるわけではないんです。

「先生、買い物に行きたいです」

今日の私に食先生の事が終わるのを待つ余裕は無かったので、おもむろに切り出してみる。切実な問題であったので、許可が出るのを祈るような気持ちで見守った。

しかし先生の渋い顔を見てしまうと、途端に弱気になってしまう。

先生の表情の変化はいつそ分かりやすかったのだ。私の言葉に驚く様子なども無く、あっという間に普段以上の渋面を作った。どう見ても非常に分かりやすい、反対だと言うことである。

やっぱりまだ駄目だったんだろうか。

とりあえず料理を温めて食事の準備をすることにした。こんな料理でも温かいほうが美味しいと思うので、温め直すために魔道具を動かす。

食堂に戻ると先生の渋い顔はさらに進化して、眉間のしわもすごいことになっている。祈るような気持ちで食事を並べて、先生の顔を見つめる。

しかし先生は無言で食事を食べ始めてしまったので、私もしぶしぶ手を付けることにした。

やっぱり味見したとき同様に料理はいまいちである。いくら手を掛けても、あちらから持ってきた調味料を駆使したとしても、材料の偏りには敵わないのだ。野菜が欲しい。

「明日まで待て」

食べ終わってお茶を飲んでいたときにはななかば諦めていた。だから先生の言葉が聞こえたときにも直ぐには信じられなかった。

明日までということとは、明日になったら行っても良いということではないだろうか。

私はカップを揺らして、くるくる回る濃い色のお茶の表面を見なが

ら、これはもう駄目かなと思っていたところだったのだ。

「本当ですか？」

「明日までに用意してやる」

何の用意ですか、先生。

一夜明けて

やっぱり未だ未熟ということらしく、私の魔力を抑えるための用意だっただらう。

しかし宣言だけ宣言すると、先生はまた閉じこもってしまった。正直この展開に慣れ始めている私がいる。先生の行動も普通にスルー出来そう。

しかし翌朝一番、昨日の行動をした自分を罵りたくなった。先生が私に渡そうとする物を見て泣きそうになっていた。

「これ、必要なんですか・・・？」

「必要だ」

私は水色の布の上に置かれた、大量のそれを恐る恐る受け取ることになった。どんなに嫌がろうときつと結末は変わらないのだから、駄々をこねても仕方が無いのだ。

それは鈍い光を反射する金属だった。通常ならその濡れたように光る銀色には人を惹きつける魅力があるはずである。

「こんなにいっぱい・・・？」

「これは普通の金属より吸収する魔力の量が多い。数で補え」

出来れば私は直視したくない。それはどう見ても、私がトラウマを作った金属で作られている腕輪だった。

ただし今はめているものとは大きさは違っている。腕に通していない状態で直系が10cmくらい、幅が5mmくらい。繋ぎ目が無いところは同じようだけど、宝石などは付いていない。

しかし見た目、触れた感じ共に金属そのものであるところは、今腕にはめている腕輪とそっくりである。こんなにたくさんあるのに拍子抜けするくらい軽いところも同じだった。

ただし今私が先生から受け取った腕輪の数は一つや二つではない。

数で補えと言った先生の言葉どおりに何十個もある。いくら腕にはめている物より随分細いとはいえ、これだけ付いたら私の手首もさぞやがっちり固定されるだろう。正直私は前言を撤回したくなっている。

本日私が起きて下の階に降りていった時には、すでに先生の準備は終了していたようで食堂で私を待っていた。

先生の姿を見つけてしまった私には、寝過ごしたのかと思って冷や汗が流れた。ちなみに焦って確認にしたところ、実際には私はいつもよりも早いぐらいの時間にちゃんと起きていた。

いつも大体眉間にしわを寄せ、青白い顔をして、不機嫌そうな先生ではある。

しかし本日の先生の機嫌は今まで見た中では最も悪いようだ。体中から近寄るな、話しかけるなという空気が滲み出ている気がする。何も知らない子供が見たら泣き出しそうなほどだ。

私はそんな先生を気まずい思いで見ることしか出来ない。これほど不機嫌な様子の先生を見ると、止めたほうが良いのかなという気もひしひしとしてくる。我俣だったのかもしれない。

しかしそのために用意してもらっているのだ。せつかく準備してもらったものが無駄になってしまうので、ここまで来たら中止も言い出せない。

私は初めての街での買い物、不足していた野菜や果物を入手出来ることに多少は浮かれていた。食に対してこれほど積極的になるとも思っていなかったので自分でも驚いている。食べ物って大切だと痛感した。

だからこそ口に出したことだったのだけど、まさかこれほど不機嫌な先生を見ることになるとは思わなかった。

「一人で出掛けても街まで辿り着けない」

先生に釘をさされてしまう。眉間のしわが深い。

私はさらに前言を撤回したくなった。溜息を吐きそうになるのは我慢する。

何故なら私は、誰かに頼むのは申し訳ないと思ったから行きたいと言い出したのだ。

私の今回の目的は街に行くことではなく、野菜や果物などの食材を手に入れて食生活の改善を目指すことだった。新しい食材を手に入れることが目標である。実は私自身が街に買い出しに行かなくても、誰か他の人に食材を仕入れてもらうだけで十分に目的は達せられる。

しかしいきなり最初から躓いてしまった。

一人で行くという選択肢が無い以上、私の行動は前提から破綻してしまっている。

私の隣ではすでにラリスが待機してくれている。私が召還したわけでは無いからきつと先生が呼んだのだと思う。先ほどの先生の言葉とあわせると、何故彼がここにいるのか簡単に予想がつく。

きつと彼は私の買い物に付き合うためにここにいる。先生の中で私の本日の行動は、ラリスに付き合ってもらいながら買い物をするこ
とになっている。

これは予想して然るべきことだったのかもしれない。ほぼ何も知らない引きこもりが初めて外に世界に触れるのだから、確かに通常なら付き添いが必要だろう。

実際、私が屋敷の外に出たのは数えるほどしかない。それですら屋敷の裏にある花畑に行ったことや、気分転換の体操をするのに外に出ただけである。屋敷が見えないほど離れることになるのは正真正銘これが初めてだ。

ただこの屋敷はとても深い森の中にあるのだから、しょうがないことだと思う。

ちなみにラリスには忘れないうちに謝っておいた。結局先生との会話では別のところで決着してしまったけど、気になっていたのは確かなのだ。私みたいなのは特に出来ることは、出来る時にやっておいたほうが良いだろう。

しかしそんな私の様子を見て、先生はさらに気分を降下させたりしない。これ以上深くなりようが無いと思われる眉間のしわが更なる進化を遂げた。

準備が必要

涙が浮かびそうなほどの覚悟で、私は先生から受け取った腕輪に腕を通した。

出来るならば何とかこれをしなくても良い方法を探したいけど、今回の話は私が言い出した買い物に行きたいという言葉が原因なのだ。

先生はわざわざ私の希望を叶えるためにこれを用意してくれたのだ。自分の言葉には責任を持たなければならない。

しかし腕を入れた私は別の意味で驚いた。

何故ならこの腕輪縮まない。私の手首の形に添って小さくなったりしない。

「こ、これ小さくならないんですか・・・？」

「小さくはならない。その術式は入っていない」

悲壮な決意を固めての行動だったので全身の力が抜けた。そのまま蹲ってしまいたいところを、テーブルにもたれかかることによつて何とか我慢する。

どうやらこれは本当にただの腕輪だったらしい。

どうして先生は教えてくれないのだろうか。私がどれほどこの腕輪の反応を怖がっているのか、妙に聡い先生にはきつと分かっているはずだ。それとも覚悟を決めるよりも先に私が聞き出せば良かった

のだろうか。きっと先生のことだから聞きさえすれば普通に教えてくれた。

いや、だけど、しかし召還具とは別に教材として渡された腕輪だつて身に付けているという先生の言葉に従つて腕を通してみたらきゅつと絞まったのだ。当然これも絞まると考えるだろう。同じように術式の入ってない腕輪の癖に何故これだけ縮まないのだろう。

私は視線は自然に両手にはめている腕輪に落ちていた。

だけど私はぐるぐる考え始めた私自身に自分でストップを掛ける。今重要なのはそれじゃないのだ。

テーブルにもたれかかったままだった体も立て直す。

もうこれはそういう物ということが良いじゃないか。深く考えるのは止めるべきだ。今の私にはするべき事があるのだから。

私は潔く割り切ることにした。

とりあえず私は腕輪の数を調べる。数が分かったらそれを二つに分けた。片手にこの数をするのはどう考えてもバランスが悪いだろう。そしてそれぞれを纏めて左右の腕に通す。

縮みさえしなければこれはただの装飾品である。私は人を待たせているのだからさっさと行動を起こすべきだ。

今さらながらに私は、人前で慌てている姿を晒していることが恥ずかしくなっていた。何故なら先生の表情はそうでも無いのだけど、ラリズがものすごく興味深そうに見ている。

私はまるで先ほどの行動はちょっとした気の迷いでもあったように、澄ました表情と何気ない行動で先へと進める。取り繕うには遅いかもしれないけど、私の性格上やらないわけにもいかないのだ。

先ほどのことは出来るだけ早く忘れてもらえるように願いながら、腕輪のことを急いで片付けて先生に向き直る。

よく考えなくても、先ほどからまったく話が進んでいない。主に私のせいだ。申し訳ない。

うん、もう、全体的に深く考えるのは止めようと思う。良いじゃないか、ラリズと一緒に来てくれたら助かるのは確実なのだ。ここは素直に感謝して受け入れるのが正しい大人の行動だろう。

たとえそれが子供の初めてのお買い物にそっくりだとしても、甘んじて受け入れるべきだ。

ほら、私の知識なんて所詮本で呼んだものでしかないのだから、実践以上の勉強は無いつて言うし、一度助けてもらえれば次からは安心じゃないか。

さらに私は、街がどこにあるのかを地図でしか知らないのだ。一人きりだと辿り着くまでにどれだけ時間がかかるかも分からない。

この世界のお金の単位を知ったのもつい先日だし、この世界の食べ物のこと、買い物の方、どんな人がいるのかも先生が探してくれた本で読んで知っているだけだ。見事なまでに初めてづくしだ。

というか私はむしろ、そんな子供のためのような本を持っている先

生にこそ驚くべきだったのだろうか。

童話のような絵本に続いて、先生の貸してくれる本には何故こんなものが思うような本が意外に多い。すっかりしろ私。本来ならそこは便利だなと流すべきところではないはずだ。

そもそも私はどうやって街まで行くつもりだったのだろうか。いや私自身は普通に歩いていくつもりだったのだけど、この森には獣がいると先生から聞いて怯えていたのは誰だったのだろうか。

いろんな意味で考えが甘かった。

よく考えなくても私はまったくの素人なのだ。子供以下の知識しかないわけだ。これではお目付け役が必要だろうと先生に判断されてもしようがないだろう。正直これほど大事になるとは思わなかったのだけだ。

何となく床へと視線を落とす。

何となく自分の着ている水色の服が目に入った。

せつかくの外出なので私は出来れば綺麗な格好をしたかったけど、結局はここ数日ですっかり着慣れた上着を着ている。こちらに来たときに来ていたスーツよりも、この世界の服の方が良いことだけは確実だと思ったからだ。

屋敷の周りは深い森なのでこの格好も余り動きやすいとは言えないけれど、現在私の持っている服のデザインは基本これしか無いのでこれも諦めが肝心だ。

後悔は後で

私は今、これ以上無いほど前言を撤回したいと思っている。

今日はすでに朝から何度もそう思っていたけれど、今現在が最高潮である。

何故なら私は現在ラリスに子供のようには抱え上げられ、そしてとても信じられないようなスピードで森の中を移動している。全ての物が認識することが困難なくらいの速さで後ろへと流れていく様子を、呆然と眺める状況に追い込まれている。

ラリスは見渡す限りの森の中を、空中に浮かんだ状態で危なげなく進んでいく。木々の上に出るほど高い場所まで昇ると、空を飛ぶ存在の標的になりやすいという理由で進む場所は森の中だ。

私にはそんな知識は無いので、ラリスの説明に耳を傾けているだけである。ただし親切に説明されても、それに答えるだけの余裕が私には無い。何かと戦闘になるくらいならそれで良いと思うのみである。

この森はあまり背の高い草は生えていないようで、歩く分にはそれほど問題は無いと思う。

しかしそれはあくまでも歩く状態ならばで、木々の間にそれほど余裕があるわけではない。

明確な道もない森の中をこのスピードで移動するラリスは、いったいどういふ存在なのだろう。周囲の木々たちがまるで自分から、ラ

リズのために道を明けているように見えるくらいだった。

私は出来れば目を瞑って全てをやり過ごしてしまいたかった。

事実ラリズに説明されながらも、森を進み出した当初は目を閉じてしまっていたのだ。だけどこのスピードで動いていると分かっている以上、遊園地の絶叫系の乗り物と同じで目を瞑って周囲の状況が分からないと余計に怖い。

だから結局私は両目を開いて、前方を見つめることしか出来なかった。現在進行形で私はいつそ気絶してしまえたらと、現実を直視したくないくらいの恐怖を感じている。

私はラリズが街へ行くのに、まさかこんな手段を取るとは想像もしていなかった。こんなことが待っているならば絶対に街に行きたいなどとは言い出さなかったものを。

ちなみに今の私の服装は、淡い水色の上着の上にさらにもう一枚羽織っている状態だ。

映画などで魔法使いが着ているコートのようなもの、ローブのようなものを着ている。ただし色は映画のようにはいかず、上着よりもさらに爽やかな水色をしている。

今私の両腕に下がりまくっている、先生に今日渡された腕輪の下の布がこれだった。

形だけなら本当に映画の中のローブのように見える。たつぷりとした布が使われていて、胸元で一度止める形になっている。大きなフードが付いていて、袖口も広く採られている。これを着ると多すぎ

る腕輪も上手い具合に隠れるようだった。

ちなみにラリスは、この前私が呼び出したときに着ていたものとは別の服を着ている。赤系の服であることは変わらないけど、前回のときに着ていた服は比較的きつちりとした服だったのに今回は幾分かラフなものになっている。私が呼び出したときには背中に流していた髪も、今回はゆるく紐で縛っていた。

ちなみに現在の私は、背負われているわけでも抱き上げられているわけでもない。いざという時に両腕を使えないのは困るというラリスの主張から、ラリスの左腕の上に腰掛けているような状態にいる。さらに恥ずかしながら、羞恥心よりも恐怖心が勝って私は腕を回してしがみついていた。

私が強引に自分を納得させた食堂で、注意点を確認した時からこの状態であった。

ちなみに街での注意点は、

- 一つ、勝手な行動は取らない。
- 一つ、声を掛けられても知らない人には付いていかない。
- 一つ、もし逸れてもラリスが見付けるまで動き回ったりはしない。

だそうである。

泣きたくなった。

まるで子供と母親の約束事である。母親は学校の先生に置き換えても良いかもしれない。

しかしラリスは、反論しようとした私を後ろからいきなり掬い上げるように持ち上げた。何が起きたのか理解できなくて、呆然としているうちに注意点を繰り返され話がまとまっていく。

私は特別身長が小さいわけではないし、あちらでの情緒不安定な生活と、こちらに来てからの強制的なシェイプアップによって、以前よりは多少はすわりとしたかもしれないが所詮それだけだ。あくまでも平均的な体格であると言えると思う。

だから私はとても片腕に乗せられような重さではないはずだ。

なのにラリスは揺らぎもしない。驚くくらいの安定感で危なげなく立っている。精霊って皆こんなに力持ちなんだろうか。

どちらにしろ抱え上げられている状態であることに変わりはないので、私は今度こそかなり抵抗した。今までは言い出したくても言えなかった「買って来て下さい」も繰り返してみたい。

しかし私には先生とラリスを説得することが出来なかった。

先生から借りた地図に載っていた、この屋敷と街の位置はかなり縮小されているということ、私が歩いて街に行こうとすると何日もかかるんですって。そしてせっかく用意したものを無駄にされるのは先生には我慢ならないそうですよ。

分かりました。私が諦めるべきなんですよ、これ。私が言い出したことでもんね。

どうやら諦める以外の選択肢が私には無いらしい。

何故ならラリズは私を持ち上げてから一度も降ろしてくれないし、そのつもりも無さそうなのだ。

喚く私をすっぱりと無視して、先生と普通に会話して普通に何か受け取って普通に出てきた。先生は見送りにすら出てきてくれなかった。

こちらに来てから私には諦めるものが多すぎると思う。泣きたい。

悔いるから後悔

ラリズは移動しながらも私に色々話しかけてくれていたようだった。だけど相変わらず恐怖に支配され続けている私に、相槌を打つ精神的な余裕は無い。全てを引きつる顔のまま聞き流す。気絶することの出来ない私には前方を見つめ続けることしか出来ない。

いったいどれだけの時間をその体勢で過ごしていたのか、気が付いたときには森が途切れていた。あれほど続いていると思った広大な森も今は遠くに見えるのみだ。

いつの間にか空中に浮かんでいたはずの私たちも直に固い土の上を歩いている。

そこは見渡す限りの草原の上に細く長く伸びた道だった。屋敷の周囲の柔らかな地面とは違って、何度も歩くことによって踏み固められたと思われる硬い面を晒している。コンクリートなどですっかりと舗装してあるわけではなかったけれど、これは十分道と言えると思う。

ただしここは街道と呼ぶには余りに頼りなく人通りも極端に少ない。実際見える範囲で歩いているのは私たちだけだ。現在も歩いているのはラリズのみで、私自身はまだあの体制で抱え上げられたままである。

どうやらラリズには降ろすつもりはまったく無いようで、この体勢のままどこまでも進んでいく。

私自身にはしつかりとした意識があるとはとても言えない状態らしく今までの記憶がひどく曖昧だった。いったいどれくらいの間高速移動が続いていたのか見当もつかない。

何をしたわけでもないのに気力をこつそりと使い果たした私はただただぼんやりしていた。

しかししばらく進むとその細い道は、広く太い街道と呼ぶに相応しいものに合流した。街道の上には人の姿もぽつぽつと現れ始めて、人の連れている牛や馬も姿も見かけられるようになる。目的地は皆一緒らしく目指す方向も一緒だった。

気付けばひどく長い壁のようなものが前方に姿を現していた。

だんだんと近付いて行くにつれ、それが長く土壁のようなものだとということが分かる。その土壁のようなものはぐるりと長く連なっているようで、かなり広範囲に渡って造られているようだった。もしかしたらこれは街を囲むように造られているものかもしれない。

その土壁には一部分だけ途切れているところがあり、そこにはすでに列が出来ていた。人や馬車、牛舎、何かを乗せた荷車などがただらと並んでいる。皆もそして私達もそこに向かっていているようだ。

しかしラリズは最初から変わらない様子で歩み続けて、そしてそのままそこへ近付いていく。大分近付いてからやっと降ろしてくれる気になったらしく歩みを止めた。そして抱え上げていた私の足が地面に着くようにゆっくりと地面にしゃがむ。

私は高速移動の余りの恐怖によってしがみついていたため、完全に麻痺していた両手は引き剥がすのが大変だった。端の指から少しず

つ動かしていき、握り締めた形で固まった両手の支配権を取り戻すためには時間がかかる。

指を自由に動かすことがこれほど大変だとは思わなかった。やつとの思いでしがみついた姿勢から解放された私は、大きく息を吸い込んだ。

そして今の私は、宇宙飛行士以上に地上の重力の偉大さを噛み締めていると思う。たとえここが地球じゃなくても、重力があつて私をこの地面に立たせてくれているだけで好きになれそうだった。どうやら今まで私はこれほど偉大なものを見逃していたらしい。

思わず地面に寝転がりそうになつたけど、それは気付いたらリズによつて素早く阻止された。力を抜いた私が地面にお尻を付ける前に、後ろにいたリズによつて両脇に腕を通され、掬い上げるように持ち上げられる。

一瞬私の体は完全に中に浮いていたと思う。完全に油断していた私の体は持ち上げられた猫のようにびろんと伸びて、気付いたときには靴の下には確かに離れていたと思われる地面の感触があつた。

状況を把握しきる前にゆつくりと私は振り向いた。穏やか過ぎるラリズの笑顔に迎えられる。

良いよもう、私には取り繕うなんて余裕は無いよ。微笑を向けられても何も返せないよ。半眼で睨む以外出来そうにないからしばらくそつとしておいて欲しい。

どうやら地面に座り込むことさえも私には許されならしい。せめて力が入りすぎたせいで凝り固まっていた肩を解そうと、肩の位置

から腕を大きくぐるぐると回す。

何度か叫んだ気もするし、ずっと喚いていた気もするけど、全ては掘り起こしてはいけないうとして記憶の底に封印しておこう。これはあれだ、思い出しではいけない内容だ。

考えると体が自然と、不自然に振動してしまいそう。ああ、一つの記事に自然と不自然が並んでしまった。けして追求はしないので、そのまま時の流れのままに消えていって欲しい。

しかし未だ私は回復したとは言い辛いのに、そろそろ現実逃避は止めなければならぬらしい。

ラリズが服を引いている。

分かりましたすみません。ちゃんと歩くので、どうか再び子供のように抱え上げるのだけは許してください。お願いします。

何も喋ろうとしない私に痺れを切らしたのか、ラリズがまた私を抱え上げようとしている、気がした。ぐったりしていたはずなのに、今まで生きていた中でこれ以上無いくらいの反応を見せて私の体は数歩下がった。

完全に腰が引けた状態なのにこんなことが出来るなんて、以外に私は元気なのだろうか。

まあそれは完全に幻だったわけだ。それだけ拒否しようという姿勢を見せたにもかかわらず、私は結局ラリズによって手を引かれていた。これでも多少は譲歩してくれたのだろうか。

土壁のようなものに囲まれた街の中に、抵抗する気力の無い私は繋がれた状態のまま近付いた。ただし強すぎる恐怖体験によって、初めての街への興味をおおっぴらに現す余力は無い。興味が薄れてしまっているわけではないのでしげしげと見つめていた。

しかしそんな私を阻むものがある。

臭いだ。鼻を突く酸っぱいような、何かが発酵したような微妙な臭気。それほどきつくは無いのかもしれないけど、それでも気力の落ちていく私にとっては辛く吐き気を覚えてしまう。思わず足を止めそうにはなっただけど、街への興味はそれよりも勝りそのまま足を進める。

しかし私の右手と自分の左手を繋いでいたラリズが急に立ち止まった。釣られて私も立ち止まり、不自然な位置で立ち止まったラリズを思わず見上げてしまう。

ラリズはその秀麗な顔に、を滲ませているようで私の顔をじっと見ている。

先には立たず

ラリスを不快にさせた理由も分からないままに謝りたくなった。ぼんやりしていた思考も冷や水を浴びせられたように一気に冷静になる。

思い返せばラリスは前回呼び出してしまったときも、今日顔を合わせてからも不機嫌な顔を見せたことが無かった。彼はいつも穏やかな笑顔を浮かべていて、常に柔らかな対応をしてくれていた。

だけどそんなラリスに対して私はいったい何をしているのか、あんまりではなかっただろうか。

前回はろくにやり方も分からない状態で無理矢理呼び出し、今回は我俣を言った私のせいでこんなところまで付き合せている。しかも時間短縮のために運んでくれたのにも関わらず、不機嫌な態度を取りお礼すらも言っていない。

普通ここまでされたら不機嫌にもなるだろう。自分のことばかりだった私自身が恥ずかしくなる。

と思ったところで、ラリスは今まで列の最後尾を目指していたと思われる行き先をいきなり変更させて歩き出した。手を繋いだままだった私も、もちろんその後を付いていくことになる。

どうやら列の先頭、土壁の途切れているところを目指しているらしい。

推測を立てながら、私は前を進むラリスの様子をそっと窺う。

謝罪の言葉をつむぐためには話しかけなければならぬ。しかし先ほどまでの自分の行動を考えるとなかなか思い切りが付かなかった。先ほどまでよりも幾分か歩みがゆっくりになったおかげで、私の呼吸は多少楽になっていた。いきなり近付くから余計に辛いのだ。少しずつならば覚悟も出来るし、この臭いにも次第に慣れていくだろう。

ものすごく酷いわけではないのだけど、これはいったい何からの臭いなのだろうか。もしかしたらこれだけ人が集まっているのだから、何か臭いのきついものを運んでいる人がいるのかもしれない。

私たちの居たところからは少し距離があったけど、それでもラリズはゆっくりと進んで行く。しかし近付くにつれ、腕を繋いでいるにもかかわらず時々私を窺うように見下ろすようになった。

私は謝罪の言葉を考えながらも、ラリズの様子に不可解なものを感じてしまう。

私を見下ろすラリズの顔にはすでに不機嫌な色がなくなっていたからだ。むしろ私の方が彼に対して怒っているように、心配げに私の様子を窺っている気がする。原因が分からず次の行動に悩む。きつと私の眉間には皺が寄っていると思う。

ラリズは列に並んでいる人たちを無視したまま、その二人へと迷い無く進んで行く。

列に並ばなくて良いのだろうか。私は列に並んでいる人たちに見られている気がするのだけど。

不安に駆られた私が軽く腕を引いて歩みを止めさせようとしても、ラリズはお構いなしにそのまま進んで行く。ただ私のほうをちらりと見て穏やかな微笑をくれ、握り締めた手に僅かに力を込めてくれたけど私はそんなものが欲しいわけではない。

説明をして欲しい。大丈夫なのだろうか。

少し時間は掛かったけれど、それでもちゃんと目的地に着いてしまっただった。ちなみ目的地は私が思った通りにやっぱり土壁の途切れていているところ、列の先頭が目的地のようだ。

ここではファンタジーの定石通りに門番の人が検問を行なっているようで、二人の男性が列に並んでいた人たちと話している。

二人の男性は、私がかがファンタジーの溢れている世界だと知ったときに想像したそのままの鎧を着ていた。飾り気などがまったく無い、おそらく人体の急所のみをカバーしている分かりやすい鎧である。

こんな急に目の前に出ることにならなければ、列に並びながらきちんと確認が出来たものかと思ってしまうと少し悔しい。

ざっと見た感じ、金属で出来ていることは間違いないと思う。私の腕にはまっっているようなおかしな効果もおそらくは無さそうだ。あちらでの鉄にごく近いもののように、どちらかと言えばこちらの方が私には馴染み深いものに見えた。

とうとう列の先頭についてしまって、年甲斐も無く尻込みをした私は思わずラリズのほうに体を寄せていた。

「すみません、連れが具合を悪くしてしまつて・・・」

しかし緊張で体を硬くしてしまった私と違って、ラリズの声はどこまでも穏やかだった。

思わず私は門番らしい人たちから視線をラリズに移してしまつたけど、一歩下がった私の位置からではラリズの顔は見えない。

「これが通行証何ですけど、確認してもらえますか？」

ラリズが門番へと何かを渡す。手の平に収まるほどの大きさの板状の何かで紐がついているものようだった。

今まで別々に行動していた男性たちは、何故か片方の門番がそれを受け取るともう一人も近付いてきた。二人は覗き込むようにしてそれを確認している。

しかし手の中のそれを裏返すと、今まで険しい顔で高圧的に動いていた二人が笑顔になった。

思わず私は拍子抜けしてしまい、訳が分からずラリズの様子を窺う。

いきなり友好的になった二人は、それを笑顔のままラリズに返した。

一度驚いていたようにも見えたけど、あれは何が書いてあるものなのだろうか。

新しい場所

私たちはそのまま街へと入ることになってしまった。どうやら先ほどのあれだけで、実にあっけなく私たちの街へ入る許可は降りてしまっていたらしい。

しかし私は待望の街に入れるのことに素直に喜べない。妙に納得できないものを感じてしまう。あまりにもあっけなさ過ぎると思うのだ。それほどラリスが男性たちに渡した通行証とやらの確認は確実なものなのだろうか。

おそらくこの街の門番であるはずの彼ら。

なのに彼らはラリスの先ほどの言葉からして体調を崩しているらしい私の様子を確認するどころか、彼の持っている通行証以外の荷物の中身すら確認してこない。

ここが何から街を守るための防御の場であるかは知識不足の私には分からない。だけどそれにしても、随分ずさんだ検問のように感じってしまうのは止められない。

と言うか、いつのまに私は列に並ぶことすら出来ないほどの体調不良になっていたのだろうか。

急な移動によって多少気力が落ちて臭気によって少しだけ調子が悪くなっているけど、それでもここまで歩いてこれた。ここには今までの森の中とは違い興味を引くものも山積みだ。先ほどまではぼんやりしていたけれど、意識のはっきりした今は質問したいこともあるし、じっくり見たいものもある。

ラリスに先ほどまでのことを謝りたいし、男性たちから返してもらった何かのことも聞きたいしで、私はその場から動くことに若干の抵抗があった。私の腕を引いているラリスの腕を逆に引いて、彼の意識をこちらに向けてしまいたくなる。

しかし結局、ラリスの顔とその手の中に何かの間とで、視線をうろうろと彷徨わせながらも門を潜ることになった。

何故ならあっけなく私たちに許可を出し、背を向けてしまった男性たちを思わず視線で追ったとき、見えてしまった。いきなりショートカットすることになったため今まで視界に入らなかった本来の列に並んでいる人たちが。

彼らの多くはまるで目を合わせることもすらも嫌がるように私たちを見てはいない。けれど僅かばかりの、こちらを向いている視線はとても好意的なものばかりとは言えなかった。敵意というわけでも無く、怒りというわけでも無く、そこに含まれているものは何なのだろうか。

ただどれほどここに並んでいたのか私には分からなくても、いきなり横から来た奴に順番を抜かされたら確かに良い気持ちなどはないだろうことは確実だ。

こちらを見ていない人たちの視線も私たちに興味が無いというわけではなく、視線が私たちを向いていないだけで、全身でこちらを窺っているように感じてしまう。

無性に申し訳なくなってしまうけれど、私は結局ラリスに託されるままにこの場を離れることにした。

ラリスがこうするべきだと判断してくれたのだ。この世界のことをろくに知らない私一人でどうにかなる問題ではないのだから彼の指示に従うべきだろう。

「先ほどはすみませんでした」

そして私は動き出した勢いで、そのまま声を掛けることにした。勢いも大切だと思うから。

今謝ることが出来なければ、きつかけを掴めないまま流すことになりそうだった。それはあまりに申し訳ないし恥ずかしい。

「なんのこと？」

しかし逆に聞かれることになり微かに戸惑う。

「せつかく連れてきてもらったのに失礼な態度を取ってしまったんです」

「何だ、そんなこと。あれくらい何でもない。気にすることも無いよ」

いつものラリスの穏やかな笑顔に少しだけ肩の力を抜く。

私は先ほど門番と退治していたときのラリスの笑顔に、同じ笑顔のはずなのに違和感を感じてしまっていた。いつの間にか不思議と緊張を誘われているようにも感じていたらしい。

「ありがとうございます。今日は本当に助かりました」

やっとお礼を言うことが出来た。

謝罪とセットにするのは少し情けない気もするけど私は悩みだすと切りが無い。この先しこりを抱えたまま接することになるよりはずっと良いと思う。

「先ほどの門番の人に渡していた紐のついた物は何だったんですか？」

「彼らに言ったとおりに通行証だよ。裏にあの人の印が入っている。」

「あの人？」

この街の偉い人の許可か何かだろうか。

「先生って呼んでいるんだっけ？ 森の中の屋敷に住んでいる魔術師だよ」

違った。森の中の屋敷って言ったら先生のことだ。

と言うか通行証が証明するのは、偉い人とかの許可じゃなくて、その通行証が誰のものかなんですね。

「こんなに簡単に町には入れるくらい先生って凄かったんですか？」

「凄と思うよ。彼ほどの力を持つ人間はこの世界にはそうそういないから」

そう言うと彼は、今までの穏やかな笑顔を消してまるで悪戯をした子供のように笑って見せた。

「だけどいつもは通行証を持っていても並ぶことにしている」

私を見下ろしていた彼はさらに面白そうに笑顔を深くする。微かな含み笑いさえ聞こえてきそうだった。

「以外と目立つからね。今回は特別。おまけも付けてあげたからスムーズだったね」

ラリスの言っている意味が分からなくて私は首を傾げた。

街のこと

「約束を一つ追加しよう。具合が悪い時は素直に言うこと」

街に入ったラリスは、門の直ぐ近くに出ていた屋台で器に入った飲み物らしきものを買って渡してくれた。

あまりにさり気なくスムーズに渡されて、私は思わず素直に受け取ってしまった。面食らいながらもお礼を言って、ラリスに手を引かれるまま通行の邪魔にならないところまで付いていく。

歩きながらそつと周囲の様子を窺うように見た。

ぱつと見る限り、少し離れたただけなのにもう私たちを気にしている人間はいないようだった。人の気配なんて上等なものが分かる私では無いので本当にいないのかどうかは確かではないけれど、とりあえず私にも分かるほどの露骨に嫌なものはすでに感じない。

ラリスが立ち止まったところで甘い臭いに誘われてやっと器の中を覗き込むことが出来た。薄い橙色をした液体が入っていることを確認してから、喉が渴いていた私は恐る恐るそれに口をつける。

どんな物からとったのか、口に含んだそれは予想以上にさっぱりとした、しかし適度に甘みのある飲み物だった。程よい酸味のあるそれは、色さえも少し濃ければあちらのオレンジジュースとほぼ変わらない。

しかしそれにしても、私にはラリスの判断基準が分からない。確かにあの臭いによって私は吐き気を感じていたけれど、その前に明ら

かに恐怖の高速移動によつて体調を崩していた。

ゆっくりと口を湿らせながら、道行く人たちを確認する。周囲に敵意を持たれているわけではないことを確認一息付くと回り全てが気になった。

未だそれほど離れていない門を見上げる。

そして今度こそ私はちゃんとラリズの話聞くことが出来る。

お金に関してはラリズが先生から預かっているらしい。気になるものがあつたらまずは自分に声を掛けて欲しいと言われてしまった。さらに子供のお使い感が強くなったことに地味にショックを受ける。

ラリズが門番の人に通行証を渡したあの時、私の目には確かにそれしか映らなかつた。しかし小説やテレビで見たように、あの時ラリズはあれ以外にも何かを渡していたらしい。

何かつて何だ。もちろんお金だ。ラリズは賄賂によつて優先的に街の中に入つたらしい。

あのときの私は上手く誤魔化せたと思つたけれど、しかしそれでも多少は不自然であつたらしい。

それが良いのか悪いのかは私には分からない。少なくともラリズはそうするべきだと感じたことは確かなのだ。他の誰でもない、私のために。

「あんまりこの格好している人つて居ないんですね」

意識して違う話題をラリスに振る。

「そうだね、その姿はローブって呼ばれる魔術師の服装だから。魔術師は基本的に激しい動きはしないから良いけど、普通に街中に住んでると裾が邪魔になるしね」

これはそのまんまローブって呼んでいいらしい。

「まだ私は魔術師未満ですけどね。ローブなんてまるで魔法使いみたいですね」

「俺を呼び出せるんだから立派に魔術師じゃないか。精霊を呼び出せるほどの魔力を持つ魔術師なんて早々いないよ。自信を持って大丈夫だ」

「まだ制御が覚束なくて、首輪ならぬ腕輪をジャラジャラさせてますし、先生の召還具ですけど」

「それもまた魔術師っぽいよ。可愛いじゃないか。だけど出来ればもう少し華やかなものが良かったね」

なんて答えたら良いんだろうか。とりあえずこのまま流そう。

「ばいですか。そういえば魔術師って少ないんですか？」

「魔術師って名乗れるのは少ないね。多少の魔力を持つ人間は結構居るけど、実際に自分の力だけで使えるのはほんの一握りだけだよ。そのほんの一握りの魔術師は、こんな日中から街をうろつかないからあまり見かけないしね」

気になる点が複数あった。魔術師は日中に何してるんだらう。先生のように研究だらうか。それとも昼夜が逆転しているって言うことだらうか。しかしそれよりも気になることがある。

「実際の力だけって他に何かあるんですか？」

「魔道具を使うために必要な魔力ってことだね。すでに完成している魔道具を使うんだったらほとんど魔力を使わないよ」

「魔道具を使うのにも魔力って要るんですか？」

「ほんの少しだけだね。動かすだけだったらほとんどの人間が出来ると思う。ただ少し値が張るから店とかだったら使用しているところも多いけど、一般の家だとなかなか手が出ないだらうね」

「先生の屋敷の中には溢れてましたけど、普通の生活で魔道具って珍しいんですか？」

「屋敷に明かりが点く魔道具ってあつたらう。あれは魔光具って呼ばれているけど比較的よくある物だと思う。ただし品質はばらばらで、屋敷にあるあれほど明るくなる物はほとんど無いね。良い物になれば便利だけど、品質が悪い時はランプや蝋燭にでも火を点けるほうがよっぽど明るいよ」

確認そして帰り道

きちんとした家の中にある店には入らずに、長く伸びた道の両脇にある露天の品物を見ながらラリスに確認していく。

今まで私が先生に教えてもらっていたことの多くは、魔術の知識を深めるためのものだ。私がする質問のほとんどが先生から借りた本の内容に対してだったけれど、本の多くが魔術についての内容だったので自然とそうなってしまう。本の中には先生がどうしてこれを持っているのか分からない、明らかかな子供向けの本も多少はあったけれど。

本来成長していくに当たって誰に習うことも無く自然に身に付いていくものがほとんどなのだと思うけれど、今の私にとっては全てが珍しい。

ラリスに質問をしながらも、私の両目は落ち着き無く露天の上を彷徨っていた。並ぶ商品の多くが屋敷では見たことの無い物で、あれもこれもと目移りして全てが気になってしまう。

何と言っても、今覗いている露天には主に野菜をが並んでいるのだ。いろんなことに流されぎみだったけれど、無理をしてまで来てた本日の目的を私は忘れてはいない。ラリスはどこに行きたいのか聞かれた時には、真っ先に野菜を扱っている店を希望した。

すると私の希望を聞いたラリスは、店の中には入らずに真っ直ぐにここへ連れて来てくれた。

門を潜って直ぐのところにある、この通りにある露天に並んでいる品は何と言っても普通の店の中のものよりも新鮮なことが特徴らしい。

「これはどんな味なんですか？」

ナスのような形をでトマトのように赤く色付いている野菜を密かにラリズに確認する。もし一般的に広く知られている野菜だしたら周りの人に訝しく思われそうなので、あくまでもこっそりと聞いてみる。

「結構苦いよ。生では食べられないと思うから違うのにしたらどうかな」

その答えに少しショックを受ける。トマトもナスも生で食べられるものだっただけに。

しかし多少苦くても、その苦味を美味しく感じる野菜もある。けれどこれがどれほどの苦味なのか、生では食べられなくても調理しただいで美味しくなる物なのかも、気にはなってもまさかここで試食させてもらうわけにもいかない。とりあえず次のものに期待して今回は諦めることにする。

しかし何度か同じようにラリズに確認していたのだけど、思ったようににはなかなか進まない。

いくら本を読んでいたとしても実物の無い状態では、あくまでも分かった振りをしていただけで現実では上手くいかない。戸惑うことばかりだった。予想以上に私がこの世界のことを知らないということ、食べたことの無い食物を口頭だけで相手に伝えることが難しい

ということだけは、これ以上無いくらいはつきりしていた。

何と言っても私には、こんな感じあんな感じと聞いても、その例えに出てきた何かすらも理解出来ない。ラリズは嫌な顔一つしないで、あらゆるものを楽しそうに私に教えてくれているけれど、だからこそ余計に申し訳なく感じてしまうのが現実だ。

非常に残念には思いながらも、今回は自分で選んで買うことを諦めるしかなかった。

予想以上の惨事に相談した結果、野菜の選出はラリズが露天の人に交渉してくれることになった。ラリズにまかせっきりのものがまた一つ増えて、これもまた申し訳なく感じるけど苦渋の選択である。

何と言っていくら朝早くに屋敷を出てきたといっても、このままでは野菜選びだけで日が暮れてしまいそうだった。せつかく来たから出来るだけ多くのものを持って帰りたいと言うのが本音だけれど、それに囚われすぎて時間が足りなくなる、何てことになったらもっと困った事態になる。

諦め悪くぐずぐずとしながらも、私は結局はラリズに迷惑を掛け通すことを選択した。

しかし行動方針が決まってしまうと、今までの行動が嘘のようにあつという間に荷物が増えていく。

幾ら言っても荷物持ちすらもさせてもらえない私は、ただラリズに付いて行くことしか出来なかった。どうやら今回の私は、初めてのお使い以下の行動しか出来ないことが確定してしまっているらしい。

「さてと、一度に持って帰れる荷物はこれくらいかな。十分かな？」
結局今回街には本当に私のわがままだけで来ただけらしく、私希望の野菜めぐりだけで買い物が終了しそうだった。このままでは店の中には一度も入らずに今日の用事が済みそうだ。

それにしてもラリスは持ち帰るための荷物を実に手際良くまとめていく。生の野菜がほとんどなのでひどく量があるのだけど、それを持って帰るのに適した形へと手早くまとめる。

そしてラリスは何もすることの無い私に、確認するように問いかけた。今日の行動からして彼のその言葉にはおそらく他意は無いのだろうけれど、微妙に私の胸が抉られる。

「ありがとうございます。だけどちょっと多かったですんじゃないでしょうか？」

黙り込むわけにもいかず、とりあえず見る見る内に増えていったその荷物の量に対しての私の思いだけを伝えることにした。

「このくらいなら大丈夫だと思うよ。と言っても、人間が一度に運んでも不自然じゃない量しか運べないから、あまり種類は多くないけどね」

人間が、一度に、ということとは、ラリスは実際にはどれほどの量を運べるのだろう。気になるところではあるけれど、聞くのも怖い気がするのでこのままスルーする。

私はこれから、今日街に付いたその時からずっと考えないようにしてきた問題について直面する。

「帰ろうか、あそこに」

そう来たんだから帰らなくてはいけない。来たんだから。

私は、いつか、帰る。

「そうですね、帰りましょうか」

とりあえず私は先生の待っているあの屋敷に帰る。そして私は今日のお礼を言おう。

ちなみにずっと考えないようにしていた屋敷への帰り方については、私は今度こそラリズを説得する。

回想もしくは現実逃避

先生と初めて会ったあの日、私はかなり動揺していた。私は以前AEDの講習に出たことがあるから、ちゃんと緊急時の対応の仕方も習ったことがある。だけどあの時私はその時のことをまったく活かしてはいない。

倒れている人を揺すってはいけないということ、きちんと分かっていたはずなのに、思いきり、しかも何度も揺すっている。その上、呼吸のためにきちんと気道を確保していなければいけないことも忘れていた。きっと他にもいろいろと抜けていることがあった。

動揺のあまりに行動に移せないなんて、何て講習を受けた意味の無い。

必要になるような状況にはならないことが一番だけど、生きていく上で何があるか分からないから学ぶのだ。今後に活かすというのも変だけど、いざというときに何が出来るかかって大事だ。人の命に関わることだったらきつと特に。こんなことでどうする、しっかりしろ私。

そもそもあの時私は、倒れている原因が空腹だと分かって気が抜けてしまったけれど、空腹でだって人間は命を落とす。私の周りに居なかったというだけで、日本にだって栄養失調で倒れる人が居るのだ。

そう考えると食事ってやっぱり大事だ。私は帰ったら気合を入れて食事を作ることしよう。

そう言えばあの時飲んだスープ。先生が振舞ってくれた、そしてあまりの味気なさに私に自分で食事を作ることを決意させることになったあのスープにも秘密があった。

何とあのスープは、一度に使用する分量ごとに具材すらも混みで用意されている、お湯に落として暫く待てば良いだけの固形のものが基本だった。まさかのインスタントスープ。携帯食にすら出来そうなこれを、先生は日常から食べ続けていたらしい。

このファンタジーの世界で普段から食べているのは、スローフードどころかお湯に落として直ぐ出来る簡単インスタントスープ。先生は簡単に私の想像の上に行く。

だけどあの時のスープの味から考えて、先生は本来一人分のものを無理やり二人分へとお湯で増やしたようだ。どれだけ薄めれば確かに味もしないだろう。

ちなみに先生はあの時お湯を沸かすことすら面倒で、そのスープの素を直接鍋に入れて使ったようだ。ちなみに置きっぱなしになっていた鍋を後日片付けたのが私だから気が付いてしまった。

だったらその時スープの素の数を増やせば良かったのに、口には出せなくてもそう思ってしまうことが止められない。いや、一応次の日には少し濃くなっていったようだから、多少は増やしたのかもしれないけど。

パンもやっぱり、あれは特別長持ちする種類だそうで、長期保存に向いているいうものを選んでいったようだ。いつもまとめて調達してはあればっかり食べているそうだ。ジャムとかは無かったけど厭きないのだろうか。

確かに痛むことを考えたらしょうがないのかもしれないが、先生はあまりに食に対して興味が無さ過ぎると思う。

だから私は、勝手に食事を作り、ときどき屋敷を掃除して、二階の物をそつと片付ける。

そして勝手に満足してみる。

というか、先生、あの時食事したのは最後に食事してから数日振りだつて言っていた。さすがに水分はその間も取っていたようだけど、集中しすぎて食事の用意をするのを忘れる人を私は現実に初めて見た。

ちなみに寝たのも数日振り。最初に私が見つけた時倒れているように見えたけど、実際にはあれは寝落ちだったようだ。きつときりの良いところまでいって気が抜けたのだ。

後日体調のことを聞いた私に、先生は淡々と教えてくれた。

死んでしまう、死んでしまつて、先生。人間そんな丈夫に出来ない。百歩譲つてもそんなことが出来るのは若いうちだけだ。もうおじいさんだよ。無理すると体に出るよ。そんなこと言っても聞いてくれないだろうけど。

先生にとっては、食事も睡眠も、自分を煩わせる面倒なものでしかないのだろうか。美味しい食事も、気持ちの良い睡眠もきつと大切のものでは無いのだ。その必要があるから、仕方なく日常の生活の一部として行動しているだけ。

一番大切なものがはっきり決まっていて、他のものはきつとみんなそれ以外なのだ。大切なものが大事すぎて、他のものが要らないのかもしれない。先生らしく答えはきつと非常にはっきりしている。まだ知り合って少しだけど、先生はそんな感じで生きてきたのでは無いだろうか。当たっているだろうか。出来れば外れていると良いと思う。

あの時、先生が私を受け入れてくれたあの時の理由を私は聞いていない。ただ何となく、完全な善意から助けてくれるような人じゃあ無いということだけは理解してしまっている。

いつかその理由を先生は私に教えてくれるだろうか。出来れば私の勝手な想像を笑い飛ばせるくらいの奇抜な理由だと嬉しい。

だけど先生は、あの時、それでも私のために料理を作ってくれた。眠気でふらふらになりながら、スープを作り、パンを切り、私に振舞ってくれた。

涙が出るくらい美味しかった。おじいさんがおじいさんで良かった。

意識消失もしくは感謝

「ただいま戻りました」

気が付いたら私の目の前に先生がいた。先生が屋敷の外にいたとは思えなくて、周りを見渡すまでもなく今私のいるここが屋敷だということに分かる。

いつの間にか帰り着いていたらしい。

先生を先生だと認識したら、ずっと頭に残っていた言葉だけが私の中からずりずりと出てきた。伝えたいことは他にも色々あったはずなのに、ほかの言葉は形にならずとっさに出てきたのはそれだけだった。

ちなみにそれは、「伝えたい言葉がたくさんありすぎて胸がいつぱいで」何て感動的な理由では無い。

物理的に言うと迂闊に口を開くと何かが奥から込み上げてきそう、で、具体的に言うと倦厭していた恐怖体験によって思考が働かなくて、である。

私は一刻も早くベッドに横になって、出来れば夢は見ないで眠りたい。

何故なら、街からの帰り道には、あの恐怖の高速移動が再び繰り返された。

私のラリズへの説得は、説得にはならなかった。正確に、私がラリ

ズに説得のつもりで話しかけていたことはすべて聞き流されていた。屋敷への帰り道では、私はラリスに街を出るまでと出てからのしばらくの間、ずっと街に来るときの高速移動が私の精神に負担を掛けたかを訴えていた。それに対してラリスは、確かに私の言葉に真摯に向き合い頷いてくれていた、はずだった。

なのに門を潜って僅かばかり歩いたときには、まだちらほらと周囲に人影があつたのに私は再び抱え上げられていた。あまりに突然なことに、未だ説得中だった私の口は間抜けな形で固まり、紡がれていたはずの言葉も全てストップした。

行動全てをストップさせたまましばらく固まり悩み、そして私は諦めた。

そのせいなのか、直ぐに高速移動が始まるわけではなかったのだけど、こうなってはきつと何を言っても聞いてもらえない。暴れても叫んでも降ろしてはもらえない。肉体的な暴力を振るわれているわけではないのだから潔く諦めるべきなのだ。

ラリスだって好きで私を運んでいるわけは無いのだ。こうする理由があつて、こうするしかないから私を抱え上げているだけで、決して絶望する私を楽しんでいるわけでは無いだろう。

私は固まったまま必死に考えた。黙った私の代わりにのようにラリスが何か話しかけてくれている。

地面を歩くときには空中に浮かんで移動するときとは別の注意が必要になるそうだ。背の高い草が生えていなくても、下生えの中には何が潜んでいるか分からないから。

そうなんですか、参考になります。次に森に出るときには注意しますね。

言葉には出せず心の中だけで反応する。獣や草に対する注意点もいくつか教えてくれたけど、そちらは実行出来るかどうか微妙なものばかりだった。現在の私の参考になるかは正直分からない。

そんなことをしている間にも、いつしか周りの景色は高速で移動し始めていて、私は思考を留めておく努力を放棄するこちにした。ただこんな状態でも私は気絶することが出来ないようで、ずっと目だけは開いていた、はずだ。

そして気が付いたら屋敷の中、目の前に先生がいた。私は先生に対して一言だけ呟いたけど、何をやる気力も湧かずに結局先生を見下ろしたまま黙り込んでしまった。

先生会うの凄く久しぶりな気がする。朝出かける前に会ったばかりなのに、もう随分長い間会ってなかったような気がしてしまう。当たり前だけど何も変わっていない先生に私は密かに安堵した。

そう言えば先生は食事を食べてくれただろうか。

出かける前に朝食の準備と併せて用意をしておいたのだけど、果たしてあれに先生は口を付けてくれたのだろうか。私自身は自分で作っておきながらも、代わり映えない食事に大分参っていた。

先生は私以上に長いあいだ、あの食事をずっと続けていたはずなのだけ。

ちなみに私は、街では何も食べなかった。

飲み物は街でも口にしかたけど、固形物は屋敷を出る前に朝食を食べたのが最後である。けして街にいた時間が短かったというわけではないけれど、街を出るそのときにも私には食欲はわかず、結局何も食べられなかった。

街では店に入らなくても、屋台のような仮説の場で軽食などの販売をしていたし、食べ物匂いもそこかしこに漂って充満していた。体調を崩していた私には辛かったけど、本来ならばそれらに惹かれて客は店に集うのだとは思う。

私自身も、未知の食材の味を知るためにも、その食材の調理法を知るためにも、本来ならばそれら屋台には積極的に挑戦していくべきだった。

しかし私には、それら食べ物に手を伸ばすことがどうしても出来なかった。それどころか臭いを嗅ぐだけでもダメージを受けていて、調理済みの食べ物にはできるだけ近付きたくなかったほどだった。

それだけで、あの時の私がいかに参っていたかがはつきり分かっています。

私達が街にいた間中、ラリズは色々な食べ物を勧めてくれて、そして少しでも私の興味を引けば購入しようとしてくれていた。本来の私なら喜んで、そのせっかくの好意を受け入れるべきだった。

しかしあの時の私には、どうしてもそれを受け入れるだけの余裕が無かった。

「私今何か口に入れても飲み込めません」

やっとの思いで伝えてようやくやく諦めてもらった。

失敗もしくは自己反省

二度にわたる恐怖体験によって私の精神はすっかり参ってしまっていた。

本当に参っていた私は、すでに屋敷に着いているにも関わらずラリズに抱え上げられている状態のままであることに疑問を持つことも無かった。

ただし仮に直ぐに降ろしてもらおうとしても、きっと私には自分で自分の体を支えることすら難しかっただろう。蹲るくらいしか出来なかったと思う。

しかし時間が経過することによって、やっとどうにかこうにか傷ついた私の精神も修復してきた。

そして肉体よりも精神の修復が早かったために、未だ満足に動けない状態でありながらこの体勢に耐えられなくなっていた。

「お、降ろしてください・・・」

屋敷内でも、あらゆる場所の天井が高いため、そしてラリズが上手に気を使ってくれていたためなのか、抱え上げられた状態でありながら私がどこかに体をぶつけることは無かったけど、それ以上にこの状況は私にとっては痛かった。

抱え上げられた状態から一度目以上に苦勞して、私の意志とは別のところでくっついていた体をラリズから剥がしてもらおう。ただし自力では難しかったためにラリズによって。

床に足を付いてから、そのまま倒れそうになる体を自分で支えて、そして支えきれずに倒れそうになるところを支えられながらお礼だけは伝える。

しかしどう考えても今日はもうこれ以上動くのは無理だった。夕食の準備は名乗り出てくれたラリスに甘えることにして、私はもう一度お礼を言つとそのまま部屋に引っ込むことにする。

運んでくれるというラリスの言葉は丁寧に断り、しかし壁に縋り付くようにして移動する。入浴も着替えも、洗顔すらも諦めて私はベツトに転がる。

何も考えられなかった。ラリスの言葉は断つただけがせめても私の矜持だった。

これ以上は本当に何も。

幸運なことに悪夢に魘されることは無かった。あの状態で夢を見たら、確実に悪夢になるだろうと思われたから朝起きたときには何も覚えていなかったことは幸運だったのだろう。

ベツトの上から起き上がることも出来ずに、ぼんやりと天井を見上げる。

起き上がらないのではなく、起き上がれない。

体のあらゆる部位がまるで錆付いているようにぎしぎしと痛んで、軋みをあげているように感じてしまつ。

しかしこの痛みはいつの間にか私が怪我をしていた、何てわけを感じているわけではない。

私にはこれが何か分かっている。こんなに痛いのに、誰かに話したとしても本当の意味では同情してもらえない、むしろ生ぬるい笑みが返って来そうなのは、そう、

「筋肉痛だ」

確かに昨日の私はこちらにお世話になつてから最も動いていたし、むしろこちらに来てからの私は引きこもりに近い生活を送っていた。甘やかされまくった私の肉体は、昨日一日の行動に耐えられなかった。

痛い。

久方ぶりに感じるこの動くたびに全身を刺すような、しかしたとえ動かずに安静にしてもけして消えることの無い鈍い痛みは私に一つの教訓を与えた。

出来れば出したくなかった結論だけど、これ以上後回しには出来ない。

何か行動を起こす前には、確認したほうが迷惑を掛けない。

未来展望もしくは目標

「先生、何か効率的な方法知りませんか？」

毎度のことながら、朝食の時間に合わせて先生に相談してみる。

しかし本日の朝食は今までとは決定的に違っている。今まで一度も並んだことのない、幾つかの料理が新たに初お目見えしてテーブルの一員となっている。

買出しによって手に入れた野菜は、とりあえず少しずつ刻んで順番に味見してみた。購入時にラリズによって、生で食べても問題のないものばかりをちゃんと選んで揃えてもらっているので、私は腹を壊す心配をしないで安心して味見が出来る。

味と見た目で結びつかない野菜がほとんどだけど、中には野菜のはずなのにとってもありえないような妙な癖があるものも意外にあった。

味と見た目でまったく違っているものは、味優先選んで調理してみる。出来るだけあちらの味に近いものを作りたかったので、多少彩りが違っていてかなり派手になっていても、味は大丈夫。いけるいける。

パンは例の保存食もどきがあるので新たに調達はしていない。かなり硬いし、風味もいまいちなのだが、私は食べ物を捨てるのは嫌いなので食べる。これからは、これを美味しく食べる方法を見つけていきたい。

「上の階にあるものは好きにしる。何を使っても良いし、壊しても

良い」

二階から上にあるものは何でもくれると先生は言う。ただし二階に置いてあるものは、私には使い方が分からないものばかりだ。

私は掃除をした時から気になっていた、上の階にあった物を思い出した。

「それはさすがに申し訳無いです。私のお借りしている部屋にもいろいろありますが、貴重品らしきものもたくさんありましたよ」

「必要無い物だ。あるだけ邪魔になるから上げさせた」

あれだけの量をいつたい誰がしたんだろう。

しかし捨てるではなく、とりあえず保管ということは、何かに使うつもりだったのではないだろうか。本当に良いのだろうかとは思いつながらも、不機嫌になられても嫌なので聞き返したりはしないことにする。

「魔石があつたはずだ。魔力を込められる」

魔石って言うくらいだから石だろう。そういえば、一杯に石が詰められている部屋があつた。何に使うのかと思つたがあれが魔石だったのだろうか。

これはその魔石に魔力を込めるのが、効率的な勉強方法なのだろうか。

「ありがとうございます。魔力ってどうやって込めるんですか」

「腕輪と同じだ。常に持ち歩け」

なるほど。ならば私は邪魔になりそうだけど、今日から常にあれを持ち歩こう。石そのものに見えるものもあつたけど、持ち歩くのならばあれも腕輪と同じように軽い存在だと嬉しい。

多少減っていたとしても分からないほど数があるので、多少失敗しても許されそうな気がする。

一人静かに決心していると、先生が話を続けた。

「魔力を込めた魔石があれば魔道具が作れる」

分かりました、先生。そこでやつと魔道具に繋がるんですね。そして魔道具を作るのを目標にするんですね。そういえば先生に貰った腕輪、あれを魔道具にしろって言ってたな。

「ありがとうございます」

お礼を言って食器を片付ける。

召還術もしくは召還者

召還術は召還する方に、多少強制力があるため、基本的には召還された方は逆らえない、らしい。普通、召還するときに、そういう術式を組み込んで召還する、らしい。

だけそ、まれに間違いで凄く強い何かと呼ばれて、分不相応な力を願った誰かが調子に乗って身を滅ぼしたりもする、らしい。何故なら強い存在にはそれなりの報酬が必要なので、用意できなければそこで終了となるから。

召還する側に強制力があるなら、そんなことにはならないと思うのだが、報酬を用意しておいて、その報酬の代わりに力を借りるということになっている術のため難しいらしい。力の強いものほど大きな報酬が必要になるようで、そもそも力が強ければ、その召還術自体を撥ね退けることも出来るようになるということだ。

さらに、長く召還したままでいるためには、召還者同士に何らかの繋がりが必要になることもあるらしい。世界には強制力があって、本来この世界にいないものは世界自体が拒むようなのだ。居続けるためには抗う必要があるが、それには何らかの力が必要で、繋がりがあると魔力は最低限ですむ。

だけど、魔力がまったく必要無くなるという訳では無いようだ。だから召還され続けているために、追加で報酬を要求されることもあるし、要求されなくても用意しなければならぬこともある。

そして気に入らない召還主でも報酬が用意されてしまうと、契約としてある程度縛られてしまう。ただし凄く気に入った相手同士だと、

お願いねー、うん良いよー、みたいな最低限の魔力のやり取りですむアバウトさもありのよう。

先生は面倒で、少しでも他者を関わる回数を減らしたかったようで呼び出すときに契約が切れたら勝手にオートで帰るように設定しているらしい。通常は、契約が切れるときに両者で確認する。

私自身が行う召還術は、先生がくれた召還具を媒介に、私自身の魔力を報酬に行っているようだ。基本的に出てくるのはラリスだけのようだけど、繋がりやすい何かがあるのだろうか。

それにしても召還術を学ぶことによって、何となく私は自分自身に微妙なものを感じてしまう。

私はなぜ帰れないのだろうか。

私は先生の前に現れたのだから、先生が召還者で良いと思う。それなら私はすぐに帰れたのだ。ハッピーエンドである。

だけど先生は私の召還者では無いそう。実は私もそう思う。先生は人嫌いだから、だからこんなところに住んでいる。

だけそ先生の言い分は違う。召還術は基本的に、召還するとき、召還される側にも分かるものらしい。召還された先がどこなのか、召還されて何をさせられるのかは、分かるときと分からないときがあるようだけ。

先生の魔術が失敗したとか、暴走して、私を連れてきたとかでも無いらしい。先生はこの世界で最も魔術の制御に優れているそう。そもそもあの時、先生は、術式計算に区切りがついて休憩を取ろう

としていたそうだ。もちろん魔力は使っていない。

そして、何よりも大前提なのは、召還された者の世界にも、魔力と魔法と魔術があり、召還された者も必ずそれを使えるということなのだ。

アウト。思いっきりアウトだ。魔力だけだったら私の知らない所で、もしかしたらあったのかもしれないが、私はあちらで 魔術を使えない、使ったことが無い。

先生に泣いて頼んでも、先生が召還したわけでは無いから私は帰れない。そもそも私が、どこから来たのか先生は知らない。

先生が私を受け入れてくれたのは、防犯術を施しまくっているらしいこの屋敷に、間違ってもこの世界の何かが入り込むことは出来な無いと思っていたからかもしれない。

それは先生の絶対の自信であり確信のようだ。私は先生のプライドのために受け入れてもらえたのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0009t/>

今の私

2011年6月21日09時09分発行